

演劇UNIT WAN-WAN BOTAN 公演日本

「卒業」

～NOVAナビゲーション～

脚本

前原A僚太

☆CAST☆

サクちゃん：本名、大城桜（おおき サくら）。元北風高校演劇部部長。現在は受付嬢。

ミツチー：本名、三井優太（みつい ゆうた）。現在は警備員。

ローズ：本名、木下華奈（きのした かな）。現在は実家の八百屋、店員。

モリベー：本名、森下修平（もりした しゅうへい）。現在は居酒屋の店員。

ミヤザキ：本名、宮崎耕助（みやざき こうすけ）。現在は銀行員。

舞台は、北風高校演劇部部室。（木造の古びた内装であり、使われていない資料室を演劇部部室に改造した経緯がある。）部室奥側は手前側に比べ平台一枚分ほど高くなっている。下手側の段差部分には、お手製のスロープ。（音響卓を移動させるためにかつての部員が作ったもの）舞台上手側の壁沿いに校舎廊下へ出る扉。（すりガラスがはめ込まれており、扉の向こう側に人物がいるとうつすら舞台上から分かるようになっていた。）すぐ近くに照明スイッチ。舞台下手側の壁には教室にあるような窓。カーテンは開いており、夜の景色。うつすらと月明かりが差し込んでいた。

舞台奥側には、掃除用具入れ。ブロッコリーを模した奇妙な人形。本棚（かつての台本や演劇関係の本が詰まっている。）ホワイトボード。ホワイトボードの裏側には、演劇部らしく箱馬が置かれている。

舞台手前側の下手壁側に、キャスターの付いたラックがあり、CDやMD、プレイヤー、サンプラーがしまってある。「」の演劇部「おけの音響卓」のようである。

部室全体にはいたるところに張り紙「遅刻厳禁」「お菓子持ち込み禁止」「あごひつじ、おはよう」などなどが貼られている。中でも田を引くのが、舞台奥側の壁一面に貼られた「あめんぼのうた」の模造紙である。

現在、部室には夜の静けさが広がっている。しばらくすると扉の前に誰かがやつて来る。「ガチャガチャ」と音を立て扉のノブが回されかかるが、カギがかかっているため扉は開かない。部室の外から声。

サクちゃん 「あ一流石に閉まってるか。……ふむ。よしそうと」

扉の前で、誰かが背伸びをする。どうやら上方にある何かを取ろうとしている様子。「ガチャ」と鍵を開ける音。部室に入ってきた女性、サクちゃん。

サクちゃん 「不用心だなー。鍵の場所、今も変わらないんだ」



演劇 UNIT WAN-WAN BOTAN 「卒業 -2025 年度卒業生 Ver-」

電気のスイッチを触るサクちゃん。部屋に明かりがともる。サクちゃんの目に部室の姿が入ってくる。

「…………うわー」

すーと息を吸うサクちゃん

サクちゃん
すこい。
すこいよ。
何にも変わつてない！
10年も経つのに

部室内を見渡しながら歩き、あめんぼの歌の模造紙の前で立ち止まる。

「ゴホンッ。あめんばあかいなあいうえおー、うきもー、じやびもおよいでぬー……ははは。ダメだあ。全然声でない! あいうえお
いっえおあいっえおあいえおあいうおあいっえかきくけー、きくけー、かきくけー、かきくけー、かきくけー、かきくけー、かきく
せ。ああ、ロミオ様ロミオ様、なぜあなたはロミオ様なの。私にとつて敵なのはあなたの名前だけー……なにぢやつて」

ひとりさりはしゃぎ、腰を下ろそうとして奇妙な人形と目が合うサクちゃん。

「え……。君、まだいたの? もう一〇年だよ? よく捨てられなかつたね。なにか言ひなよー。ははは。……あれ、といひで君の名前なんだつけ?」

そこに扉の外に人影が現れ、声がする。

ミッキー 「えー? なんで明かりついてるの?」

「僕さつき絶対に戸締り確認したよね……」

「鍵も……（ノブが回るのを確認し）開いてね、なんで？」

慌てて電気のスイッチの元へ移動し、電気を消すサクちゃん。

それとほとんど同時に部室へ入つてくる警備員の男、ミッキー。

電気が突然消えたことにびくつくも、決死の思いで照明スイッチの方に懐中電灯を向けるが間一髪でサクちゃんは光をかわす。その後も光を上手にかわしながら、奇妙な人形のかげに身を隠すサクちゃん。

ミッキー 「……だ、誰ー。泥棒？ 強盗？ あ、いやそれはどうでも変わらないか。ぼ、僕は。つ、つ強いよー？ 体鍛えてるから、北高警備室の吉田沙保里って僕のことだから。……観念してくださーい。……誰ですかー？ ……誰、でありますよね？ ……確か「」の学校昔から出るとか出ないとか噂あつたもんな。勘弁してよお。……この仕事今日で終わりなのに、最後の最後じゃあ

人形のかげで物音を立ててしまふサクちゃん。人形に懐中電灯を向けるミッキー。

ミッキー 「……えー？ まさかお前が犯人だったの？ 最後だからちょっとほしゃいでみたみたいな？ ……いや、何言つてんだろ僕。人形にはしゃべり何もあるわけないじゃんね。誰もいなさうだし、戸締りしたつもりになつてただけか。疲れがでたかなー

ミッキー、部室を出ようとするが、ブロリンの方を振り返り

ミッキー 「驕がしくしちやつて」めんね、ブロリン。それじや
サクちゃん 「そ、うだよー。ブロリンー。ブロリンだー。野菜の國の強欲な王様、ブロッコリー大王！ 通称ブロリンー。」
ミッキー 「ええー？」
サクちゃん 「あ

勢いあまつて立ち上がるが、すぐ人に形、ブロリンのかげに隠れるサクちゃん。

ミッキー 「え、何、今の。お前が喋つたの？」
サクちゃん 「げ、幻聴じゃないかな？」
ミッキー 「ううん。幻聴じゃないかな？ つて絶対言つて。これ、どうこうこと？」



演劇 UNIT WAN-WAN BOTAN
「卒業 -2025 年度卒業生 Ver-」

サクちゃん

「ぬわーはつはつは。」まかしが利かぬなら仕方あるまい。イカにもタコにも。わしが野菜の国の強欲な王様、ブロッコリー大王、ブロリンじゃあー！」

ミツチー 「なんで喋れるの？ 人形でしょ？」

サクちゃん 「貴様はたわけか、たわしか」

ミツチー 「その2択なら、たわけかなあ」

サクちゃん 「わしは強欲な王様。たとえこの身が人形だとしても、喋りたければ喋るのだ。どんな手を使つてもなあー。ぬわーはつはつは」

「あのね。親として言わせてもらひうけど、もうちょっと謙虚じやないと自分がしんどいよー」

サクちゃん 「親？」

ミツチー 「そうだよ。お前は10年前、僕が作ったんだよ。僕がつていつか僕とみんなで。お前は、僕たち北高演劇部の小道具だったんだ」

サクちゃん 「……名前は？」

ミツチー 「あ、僕？ 三井優太。皆からせミツチーって呼ばれてた」

サクちゃん 「ミツチー……」

ミツチー 「そうー。ミツチー。ビビリのミツチーなんて呼ばれてた。覚えてる。覚えてるよ。ミツチー」

サクちゃん

立ち上がり、姿を現すサクちゃん。

ミツチー 「うわあ。ブロリンが……女人になつた。強欲が過ぎのよ。ブロリン」

サクちゃん 「違うつて。ミツチー、電気つけてみ？」

言われるがままに電気をつけたミツチー。部屋に明かりがともる。

サクちゃん 「どう？ わかる？」

ミツチー 「ええっ！」

サクちゃん 「大城桜です。……イエーイ」

ミツチー 「……ヤ、ヤ、ヤ、サクちゃんー？」

サクちゃん 「そつだよ。久しごり」

ミツチー 「久しぶり。10年ぶりかなあ」

サクちゃん 「変わらないね。ミツチー」

ミツチー 「サクちゃんは大人っぽくなつたねえ」

サクちゃん 「そりやまあ、28だし」

ミツチー 「でも、なんでここに？」

サクちゃん 「廃校になつちゃうんだってね。」「」

ミツチー 「うん。今日の卒業式で廃校になつちゃつた。生徒がなかなか集まらなくなつてたんだってさ」

サクちゃん 「らしいね。私その知らせ聞いてさー、この部室も取り壊されちゃうのかなあつて。そしたらなんか来ちゃつた」「

ミツチー 「そつか。なんとなくわかるよ。楽しかったもんねえ」

サクちゃん 「不思議だよね。お芝居のことなんですっかり忘れてたのにヤ。たつきなんてトンショウ上がつちやつてジユリエットやつやつたよ。年も忘れてさ」

ミツチー 「君の小鳥になりたい」

サクちゃん 「そうしてあげたい。でも可愛がりすきで殺しちゃうわ」「

サク・ミチ 「ふはははは」

サクちゃん 「あー恥ずかしい」

ミツチー 「ほんとに。ロリジコリのお芝居なんて一回もしたい」とないのに「」

サクちゃん 「えー。演劇部なんだ!すこーいーじゃああれやつてよー。ロリジココー。」

ミツチー 「そうそれ! いろんな人から言われるもんだから、結局ロリジココーのが流行つちやつて」

サクちゃん 「そつそつ。いやー。懐かしいなあ」

そこに扉の外に人影が現れ、そのままラフな格好をした男、モリバーが入つてくる。

モリバー 「あれー、なんでこの部屋だけ電気ついてんだー? 」

サク・ミチ 「えー?」

慌ててプロコンの隠し隠れるサクちゃん、ミツチー。モリバーは一人の姿をはつきりは確認しないが誰かがいることに気が付く。



演劇 UNIT WAN-WAN BOTAN
「卒業 -2025 年度卒業生 Ver-」

モリベー

サク・ミチ

モリベー

ミツチー

サクちゃん

ミツチー

サクちゃん

モリベー

ミツチー

モリベー

ミツチー

サクちゃん

ミツチー

「つておぼは。ウケる。なんも変わってねー。……ん？ おーい、今そこに隠れたの誰だー？」
「……」
「ははは。ウケる。こんなとこにも泥棒はいるんだなー」
「あれ僕、泥棒に泥棒扱いされてる?」
「ていうか、なんでミツチーまで一緒に隠れてるの？ 驚くでしょ」
「そうなんだけど、責任感よりびっくりと怖いが勝っちゃった」
「もー」
「『云々とくけどヤー』この部屋ガラクタしかねーよ。どうせ忍び込むなら職員室とか校長室とかの方が。あ、俺、校内案内しようか？」

「ねえ。この泥棒、フランク過激でめちゃくちゃ怖いんだけど?」

「とりあえずそこから出て来てさ。ちょっと駄弁うぜ」

「ほらー。駄弁うとか言つてる」

「確かに怖いけど。……でもなんか懐かしい感じしない?」

「え？」

そこに扉の外に人影が現れ、そのまま、氣の強そうな女性、ローズが入つてくる。

「ちょっと！ モリベー！」

「おおローズ、遅いぜ」

「おおローズじゃないわよ」

「いや、お前ローズだろ。何云つてんだ？ ウケるー」

「そういう話してんじゃない」とぐり分かるでしょ

「ねえ、私の聞き間違いじゃ」

「ないと思つ」

「じゃあそこにはねのつて」

「モリベーと」

「ローズ？」

サクちゃん

ミツチー

サクちゃん

ミツチー

サクちゃん

ミツチー

サクちゃん

モリベー

ローズ

モリベー

ローズ

モリベー

ローズ

モリベー

ミツチー

モリベー

ミツチー

モリベー

ミツチー

モリベー

ミツチー

モリベー

ミツチー

モリベー

ミツチー

恐る恐る、顔を出しモリベーとローズを確認する//シチーとサクちゃん

ローズ

モリベー

ローズ

モリベー

ミッチー

サクちゃん

モリベー

ローズ

モリベー

モリベー

ローズ

モリベー

ローズ

モリベー

ローズ

モリベー

ローズ、モリベーを引つ張つて出でこい!つぶやく

「何がやばいんだよ。折角だし黙弁つていじつぜ」

「何がつて、だつて深夜の学校に忍び込んでの不審者なんだよ?」

「いや、ブームワーン」

モリベー

ローズ

モリベー

「全く。電気ついてるから諒めて帰つて言つたのに、なんで突撃してんのよ」「暇だつたらだよ。お前のうんこが長いから」「大の大人がうんこいつな」「うんこはうんこだらへ~。」

「間違いない。あの一人だよ」

「変わつてないね。見た目も夫婦漫才も」

「あ、そんなことより、ローズ聞いてくれよ。超ウケるの」

「どうでもいいけど、そのウケるつて口癖治したり? 馬鹿がバレるよ」「いや俺、これでもちゃんと風邪ひくんだせ?~」

「で? 何が超ウケるの?」

「やうやう、今やこじや。生の泥棒がいるんだよ」

「…は?」

「俺泥棒見るの初めてだからトンショソ上がつちゃつて。ちよつと黙弁つてまつてこの中に中々出でこなへんや」

「待つて! 待つて!」

「なんだよ」

「今そこに人がいるの?..」

「うん。多分2人」

「やばいじゃん。早く出でよ」



演劇 UNIT WAN-WAN BOTAN 「卒業 -2025 年度卒業生 Ver.」

「それはそうだけど、どうじゃないじやん。凶器とか持つてたらどうするわけ？」

一区器？」

「ん~。持つてたっておかしくないんだよ。…バットとか…ナイフとか」

「…拳銃とか？」

「……あり得なくはないがモ」

「だから、ついでてんじゃん」

恐怖心が強くなつていくモリベーとローズ

モード・ロード

突然の毒かサムライのアザミのアザミのアザミのアザミ

モリベー 「ダメだあ。終わつたあ。撃たれるー！」

「だから言つたのにバカベー」

モリヘ＝ミツニ

「アーマーは二つだ。壁に二つある」

モリ・ロー「え？」

「ほら。2人とも！」つむか向いて一
サクちゃん

モリベー、ローズ恐る恐る振り返り、ニツチー、サクちゃんとどう対面

サクちゃん

「だーれだ?」「え? えええ? 嘘……! サクちゃん…?」「

サクちゃん

「正解！」

「ほほほ、マジかよ」

「す、」いや。ほんとモリベーとローズだ

「おふくろ。泣くのはないだろ」「

「だつてやー」

「モリベーの//ツチー、泣き虫//ツチー。変わつてねーな

「……」やな、//シチーじゃなくたって泣いちゃう。

「ハサウエイさん、ミッキーリーなくして済めない」

「リスナフちゃん//ツチタケシの理由は同じかな?」

「多分ね。ここが廃校になっちゃうって話聞いて

「ああ、あの部室もなくな

「気がついたら、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十！」

サクちゃん
「うれしいなあ

四
一

「おまかで聞いて。和が生林まで行くからさ。林門のところへ行くついでに、懇意なところへおまかがなつて思つたんだナゾ、よくみだつたその不審者モリヅーナがつたの!!」勢いで学校まで来たのはハハナゾの怖くなつて、忍び入むか

「そうだ、聞いてよ。私が学校まで行つたらセ、校門のところへ行つたり来たりしてゐる不審者がいてセ。怖いなーどうしようかなって思つてたんだけど、よくみたらその不審者モリベーだつたの！ 勢いで学校まで來たはいいけど急に怖くなつて、忍び込むか。どうか悩んでたんだつてセー。傑作」

モリベー
「それば」アすなよ

モリベー
モレハニシタナ

ミツヰ一
「じゃあ校門でたまたま会ってたんだ?」
「え、うつせみでござる。そら、いのシリニ
変だと思つたが、2人が一緒に来る
はナフらう。ソレを二つもおなじい

モリベー
「来るわけねーだろ。そういう//ツチーはサクちゃんと来たんじゃねえのか?」

「僕は」」で警備員やつてるんだ。廃校になっちゃったから今日で終わりだけど」「ミッキー

「へー。あのミッキーが警備員！ 言われてみたら体男らしくなったね。多少は」

「昔は棒だったもんね。棒」

「うぬさいなあ——」ミッキー

「10年たてば変わるよね」
リバース

「日向のむかし、まんまとやつもいぬ王どな」

「はー? ずーっとバカ丸出しの人に言われたくないけど」

モリベー 「だから。俺は」れでも風邪をひくんだって…

「モリベーがバカじゃない根拠。それだけなんだ」



演劇 UNIT WAN-WAN BOTAN
「卒業 -2025 年度卒業生 Ver-」

モリベー

ミッチー

モリベー

サクちゃん

モリベー

「ひでーなー」

「じゃ、自他ともに認めるおバカキャラッ！」と

「ひでーなー」

「にしてももうかよい賢くなるべきだけねー。10年何してたんだって感じ」

「お、なめんなよ。数多の職を渡り歩き、経験と人脈を築きあげ続けた、語るも涙の10年間」

「へー、凄そつ」

「仕事長続させず」ハローハロバイト変えてたってだけの話でしょ

「あ。知りもしないのに決めつけのやめろよな」

「へー。違うんだ」

「そういうお前はどうなんだよ?」

「あ。話そらした」

「お前も今話そらしたよな?」

「そらしてないし。その様子じゃ、いまだに彼女いなさうだね。かわいそうー」

「人が気にしてる」と言いながらたな。そっちがその気ならこっちだつてなー

「あわわわ、ストップストップ。もつほんと昔から二人は犬猿の仲っていうか。モンタギューとキュピレットっていうか。すぐケンカするんだから」「わかってないなあミッチー」

「え?」

「2人は、モンタギューとキュピレットでもロミオとジュリエットだから」

「はあー。どこがー」

「どこがって言われてもね

「ちょっと。サクちゃん」

「ローズの小鳥になんてなつてみう、画羽ちぎられてホルマリン漬けの刑だ」

「違いない」

「ちょっと。ミチベーー。」

ローズ

モリベー

ミッチー

サクちゃん

ミ・モ・ロ

サクちゃん

ローズ

モリベー

ミッチー

ミチ・モリ
「混せんなよー。(混せないでよー)」

サクちゃん
「あつははは。なんか昔にタイムスリップしたみたい……。バカみたいな掛け合いでさ。楽しかったよねえ。1年生の時に1か

う演劇部作ってー」

ミツチー
「本当に出だしから大変だったよねえ」

サクちゃん
「うん。部員探すのに学校中駆け回って、声かけまくつて」

ミツチー
「部員が揃ったと思ったら、今度は部室探し」

ローズ
「意外と声出しできるような場所がなくて困ったねー」

モリベー
「外は運動部が使うし、教室に小道具とか大道具とかをずっと置いとくわけにもいかねーし」

ミツチー
「結局使つてない資料室使わせてもらうことになつたけど」

サクちゃん
「いろいろもの山積み。ほこりも山積み」

ローズ
「そうそう。結局、掃除に一週間くらいかつたよね」

サクちゃん
「かかつたー」

モリベー
「その掃除の時と言えばよー。Jのスロープだよ」

ミツチー
「あ一大変だったよね。この段差のところが不便だからって男子三人で作りJになつたはいいけど」

モリベー
「まーミヤザキが細かくつてよ。Jの傾斜角度があと少しどうこうとか」

ミツチー
「ただでさえ工具なんて使い慣れてないのに、何回も作り直しさせられたつけ」

ローズ
「そuddtたんだ。あんまり覚えてないけど」

サクちゃん
「ミヤザキ君ならやりそうだ」

ミツチー
「話してたらミヤザキにも会いたくなつてきたねー」

ドアを恐る恐る開けて入つてくるスースの男、ミヤザキ。誰も気が付かない。

モリベー
「あ、そつか。俺らの代は、あとミヤザキだけか」

サクちゃん
「ミヤザキ君、来るかな」

ミツチー
「来てくれたらしいねえ」

サクちゃん
「だね。なんてつたつて北高演劇部創部メンバーなんだし。部室最後の日にもし壇壇がつたのが最高だよ」

ローズ
「それ、超エモい」



演劇 UNIT WAN-WAN BOTAN
「卒業 -2025 年度卒業生 Ver-」

モリベー 「いやー、でもなあ。あいつ冷たいからなあ。冷血漢//ヤザキ」
//チ・サ・ロ 「あー」

//ヤザキ、静かにショックを受けている

ローズ
モリベー
ミツチー
サクちゃん
モリベー
ミチ・ロー
//ヤザキ
一同一斉に振り向き、//ヤザキに気けが付く。

「まあ確かに、なんか一歩引いてみていいのはあったよね」「俺たちを見下してるとだよ。あいつは何でめでやれるか」「まあ//ヤザキが、廃校のニュース聞いて、部屋まで来るかって言われた」「ちょっと想像でさないかもね」「だよなー」「確かにねー」「確かにねー」「……なるほど。俺は来ない方がよかつたんだな」

サ・ミ・ロ・モ
//ヤザキ
ミツチー
サクちゃん
//ヤザキ
ミツチー
//ヤザキ
モリベー
ミヤザキ
モリベー
ミヤザキ
モリベー
ミツチー¹
//ヤザキ
「えー? うわああああああああ//ヤザキ (くそ)ー。」
「いやいや、今は歓声だよー。」
「そりゃうー。//ヤザキ君来るかなーって言つてたいうふんとこいつが//ヤザキ君が//ヤザキ君来るかなーって言つてたいうふんと想像でさなつんだろ」「いいんだ。俺は冷たくて部屋に来るのほうがいいと想像でさなつんだろ」「いやいや、誤解だよ」「誤解なもんか。冷血漢//ヤザキ。なんだもんな」「誰だよ。そんなひでえ」と言つのは。許せねえなー//ヤザキ「お前だろー。」
「悪い」「でも//ヤザキ! 本物の冷血漢でうれしいよ」「あー、嬉しい嬉しいな。でもそもそもお前らなんぞいるんだ?」

サ・ミ・ロ・モ

「え?」

「部長のサクちゃん。だよな?」

「うん。そうだよ、変わつてないでしょ」

「ミツチー。ビビリのミツチー」

「やうやう。今は警備員やつてるんだ」

「ローズ。超スーパー努力人間ローズ」

「待つてそれ何!? アタシのことそんな風に呼んでたの?」

「で。お前誰だっけ」

「なんでだよ! 僕だけ忘れてるのは不自然だろ」

「モリベーだよ。森ト修平。略してモリベー」

「ああ。バカの奴か」

「せめて名前は呼んでくれよ」

「お前ら、もしかして死んだのか?」

「はい?」

「そもそもなきや部員全員がいる」と説明がつかないもんな

「そんなことはないんじやないかな」

「一番現実的なのは俺が幻覚を見ているという線だが、それにしてもはつきり見えすぎている。だからこれは現実だ」

「そうそう。合つてる合つてる。現実だよ」

「だが実際のあいつらがこの部室にたまたま来るか? 同じ田の同じ時間? いや。そんな非化学的なことはあり得ない。可能性から排除するべきだ」

「確かに信じがたい話だけど、実際に起じたんだよ」

「つまりお前らは、死んで化けて出でてもいる」

「それが一番非化学的だろ!?」

「演劇部時代、強く当たつてきた俺に対する復讐。そついうことだな」

「違うよ。なんでもうなるの!?」

「筋道立てて考えるとそういう結論になの」「どう筋道が立つてんのよ!?

「で。お前誰だっけ」

「ミヤザキ

「サクちゃん

「ミヤザキ

「ミツチー

「ミヤザキ

「ローズ

「ミヤザキ

「モリベー

「ミツチー

「ミヤザキ

「モリベー

「ミヤザキ

「ローズ



演劇 UNIT WAN-WAN BOTAN

「卒業 -2025 年度卒業生 Ver-」

サクちゃん
ミヤザキ
モリベー
サクちゃん
ミツチー

ローズ
ミツチー¹
サクちゃん
ミヤザキ
モリベー
ミチ・ロー
モリベー
サクちゃん
ミヤザキ
サクちゃん
ミヤザキ
モリベー
サクちゃん

ローズ
サクちゃん
ミツチー²
モリベー

「……さすがミヤザキ」
「こんなに怯えているのに」「絶対に崩さないプライド」
「よーお見事ー！」

拍手する四人

ミヤザキ

「ええい！ 蒸化すな。俺にはこの世に怖いものなんて一切ないが、あの世のものはダメだ。オバケはダメなんだ。いいか！ 俺に文句があるなら生きて出直して」「……」

ローズ

「うわー。10年ぶりのミヤザキ節だ」
「この感じ、懐かしいな」

ミツチー¹

「流石にちょっとかわいそうになつてましたけど」「なんだ！ ボソボソコソコソと。呪詛か、呪詛なのか」「ウケるー。呪詛とか言つてんだけど」「モリベーー。」

ミチ・ロー

「はいはーい」

「あのね。ミヤザキ君？ 私たち生きてるよ~。」

「騙されないぞ」

「ほら足！ みんな足あるよー。」

「……ない」

「あるよー！ あ、じゃあ。足つきあめんぼの歌ー いくよみんなー！」

「ええ、マジでー。」

「せーのっ！」

「あのね。ミヤザキ君？」「.」

「いいかお前が。生きていの間に俺に勝てないからといって死後の力を使うのはいかがなものかな。言つておくがそんなことをしても俺に勝ったことにはならないぞ。わざわざ化けて出たのにやっぱり俺には勝てなかつたと惨めな想いをするのはお前たちだ。悪いことは言わない。早く成仏しろ。今なり見逃してやる」

「……さすがミヤザキ」

「こんなに怯えているのに」「絶対に崩さないプライド」

「よーお見事ー！」

サクちゃん、ローズ、ミッキー、モリベー、ジャンプスクワットしながら、あめんぼの歌。

サクちゃん 「ほりー、足音聞こえぬでしょー。みんな生きていー。」

しづかく、足つきあめんぼの歌を眺め、部屋の外へ出る。」
「いやー懐かしいなあ。」の部室。10年も経つってどうにほんとうに変わらない。「の音響卓（サンプラ）を試しに鳴らしてみる）まだ現役なのか。MDなどでもう貴重品だぞ。」のスロープも頑張って作つたなあ。おお。なんだ、ブロリンまで残つてこないのか。はつはつは。おや？ 驚いたな。お前らも来てたのか。サクちゃん。ミッキー。ローズ。モリベー。久じぶり。「やつきのなかつたことにしてるー。」

「やつきのこと～何のことだ～おれは今来たばかりだ」「完全に過去をもみ消してー。」
「どうした、お前ら。変な顔して。座つたりどつだ？」
「さすがミヤザキ」「あれだけ取り乱したのに」「絶対に崩さない」
「フライド」「よー、お見事ー。」

4人拍手する。

サクちゃん 「ホントに全員揃つちゃつたね」
ローズ 「部室も全然変わってないし」
モリベー 「むしろ変わらなすぎだろ」
ミヤザキ 「ミッキー、今この演劇部ってどんな感じなんだ。」の警備員なんだろう?」
ミッキー 「ああうん、今度の子から聞いた感じだと」
「全員?」

ミヤザキ



演劇 UNIT WAN-WAN BOTAN
「卒業 -2025 年度卒業生 Ver-」

ミッキー

モリベー

ミヤザキ

サクちゃん

ミヤザキ

ローズ

サクちゃん

モリベー

ミッキー

ミヤザキ

サクちゃん

ローズ

ミッキー

サクちゃん

5人

5人おかしくなつて笑い出す

「なあ、みんな揃つたんだしよ。なんかやろーぜ」

「なんかつて何よ」

「なんかつたらなんかだよ。演劇部っぽいやつ」

「基礎練の前にやつてた、体あつためるためのゲームとかー。」

「そういうの」

「サクちゃん冴えてるー。」

「冴えるのは俺だつーの」

「ゲームどんなのやつてたつけ?」

「いっぱいやつたからねー」

「そつそつ。人数少なくなつちゃつて、今は演劇部じゃなくて演劇同好会」「寂しいなそれ」「だから演劇部の垂れ幕がなかつたのか」「え?」

「その辺にみんなで作つたやつかけてただろう? いらない服持ち寄つて作った」「ああ! あつたあつた」

「部じやなくなつちゃつたから垂れ幕捨てちゃつたのかなー」「もう演劇部じやねーんだもんな」

「僕らが卒業してから、部員は減る一方で、コンクールとかもままならなかつたみたいだよ」「そもそも、俺たちの後ろの代からして人数足りなかつただだろ」「でも演劇やりたいって子がゼロじゃないってことだよね。同好会があるひてことは?、それは嬉しいな」「同好会がなかつたらこの部室も残つてなかつただだろ?」「こうしてみんなが集まる」ともなかつたかもしれない」「感謝感謝!」

「ありがたやーありがたやー」

ミツチー 「当時の僕たちが盛り上がりで、演劇部っぽいやつ…」
ミヤザキ 「演劇部式だるまさんが転んだ」

サ・ミ・ロ・モ 「それだ！」
サクちゃん 「じゃあ私、鬼」

5人散らばり、だるまさんが転んだのポジションにつく(サクちゃんが舞台下手手前音響卓のそば。4人は舞台奥に一列に並ぶ)

サクちゃん 「ちゃんとルール覚えてるー？」
ローズ 「大丈夫ー」
サクちゃん 「それっぽくなかったらすぐアウトだからね」
ミツチー 「いいから、はやくー」
サクちゃん 「わかつたってば。じゃあいくよー」
富・ミ・モ・ロ 「よっしゃー」
サクちゃん 「だーるまさーんがー」

雰囲気が変わり4人が真剣にゅーつぐりと、サクちゃんに近づく。

サクちゃん 「犬になつた！」

4人、犬のモノマネ。若干照れが見える。

サクちゃん 「ちょっとー。みんな照れでませんかー？ 越居中の照れはー？」
富・ミ・モ・ロ 「一生の恥ー」
サクちゃん 「その通り」

4人、本気の犬になる。「わおーん」「ほつほつほつ」「べーべーん」「グルルツ」「ウツ」「ウツ」犬の鳴き声であふれかえる。おなかを見せぬ犬。ケンカする犬。マークリングする犬。マークリングのにおいをかぐ犬。それぞれの犬が横行する。大笑いのサクちゃん。



演劇 UNIT WAN-WAN BOTAN
「卒業 -2025 年度卒業生 Ver-」

サクちゃん 「オッケー！ みんなクリア！」

サクちゃんがサンプルを操作。正解のよつなSE。4人は満足気。

サクちゃん 「次いくよー。だーのまかーんがー」

再び雰囲気が変わり4人が真剣にゆ一つくじとサクちゃんに近づく

サクちゃん 「料理をした」

4人一斉にそれぞれの料理に移る

モリベー 「お母さんお母さん、僕も手伝う」「

ローズ 「いいわよ。じゃあ一ヤンニヤンの手にしてー」「ニヤンニヤンの手にしてー」

モリベー 「包丁とととととんっ」

モリベー 「包丁だだだだだだんっ」「できたねー」

サクちゃん 「いいねいいね、協力プレーだ。クリア！」

サクちゃんがサンプルを操作。正解のSE。モリベー、ローズがハイタッチ

モリベー 「おっしゃ」

サクちゃん 「ミヤザキ君は」

ミヤザキ 「フラング」

〃やザキ、料理がプロのそれ。

サクちゃん 「おープロだね
ミヤザキ 「客がおれの料理を待つてゐからな
サクちゃん 「はーい。クリアと」

サクちゃんがサンプルを操作。正解のSE。〃やザキ、小セイガツツポーズ

サクちゃん 「で? スルーしてたナビ〃ツチー?」
ミツチー 「んー?」
サクちゃん 「何してるの?」
ミツチー 「カツブワーメン待つての題の舞い! キツカラ3分」
サクちゃん 「……」
ミツチー 「だめ? ただ3分待つよつじう踊った後の方がおこじく感じただよ。つまり隠し味であつて、歴とした料理の匂つても過匂では」
サクちゃん 「〃ツチー! アウト!」

サクちゃんがサンプルを操作。不正解のSE

高・モ・ロ 「B0000ー」
ミツチー 「えー!」
サクちゃん 「カツブ麺は料理じやない」
ミツチー 「美味しいのに」
ローズ 「ちゃんと食べろつ」
ミツチー 「はーい」
サクちゃん 「じゃあ行くよー。だーのまやーんがー」

誰かがサクちゃんをタッチ。捕まつていたミツチーを含め全員走り出る。すかせ。



演劇 UNIT WAN-WAN BOTAN 「卒業 -2025 年度卒業生 Ver.」

サクちゃん 「ストップ！」

4人

サクちゃん「はーじめーの第一歩。はいタツチ」

ミッキー「ああやがたやね」

標：用：□ [E00000=]

ミッキー 「ねえ」んな

サクちゃん「はやー」

ミッキー 「ま、いつか。いくよー。だーねホヤーンがー」

4人ミッキーに近づいていく

ミツチー 「事件を起こした！」
モリベー 「インペリアル・ステート・クラウン確かに頂戴したぜ！」

ミヤザキ
モリベー
ミヤザキ
ローズ

「盗んだはいいが無事帰れると思うのか。うちのセキュリティーは手強いぞ。行きはよいよい帰りは恐い。どうぞ命にお気をつけて」「少しあいだき感謝感激雨あられ。だけども心配は」無用だぜ。それより手強い相棒が俺にはついたのかいよ」「無駄だ。すでに」の部屋はダイヤモンドを駆使した強固な壁で包囲されいわ」「ハヤキンッ」と。またつまらぬものを斬ってしまった」

モリベー「五右衛門、とんずらだー」

モリベー、ローズ部室から出ていく

ミシチー 「出て行っちゃったよ」

サクちゃん「おい！ 今」」におれが来なかつたかー？」

「ええー? キ、来たかな?」

サクちゃん 「バカ者！ そいつがルパンだー！」

サクちゃんも出ていく。

ミツチー 「だるまさんは？」

ミヤザキ 「あいつら本当に28かよ」

ミツチー 「元気ありますやだね」

ミヤザキ 「俺はもう限界だ。歳甲斐なぐはしゃいで疲れたよ」

ミツチー 「ミヤザキは今何してるの？」

ミヤザキ 「ん？」

ミツチー 「仕事。ストレートで難関行つたところまでしか知らないからナ」

ミヤザキ 「ああ。銀行員。院まで行つてやのまあ」

ミツチー 「ほんとにエリートなんだね。じゃあ金持ちだ」

ミヤザキ 「ま、不自由はしていない」

ミツチー 「やつぱりミヤザキはかっこいいな」

モリベー、部室に入つてきながら

モリベー 「おいお前うー」

ミツチー 「おかえり。あれ？ モリベーだけ？」

ミヤザキ 「五右衛門ととつあんばどうした？」

モリベー 「男子トークするぞー。男子トークだ。男子トーク」

ミツチー 「どうしたの急に」

モリベー 「大方、モリベー！ 今から一人で女子トークだから先帰つといつて。とか言われたんだろ」

ミツチー 「なーにが女子トークだよ。なー」

ミヤザキ 「あ、正解なんだ。流石ミヤザキ」

モリベー 「で、男子トークつて何話すんだ？」

ミツチー

ミヤザキ



演劇 UNIT WAN-WAN BOTAN
「卒業 -2025 年度卒業生 Ver-」

モリベー 「そりやお前、恋バナしかねーだろ」「恋バナって」

ミッチー 「今更大した話題にならないだろ」「じゃあどうすんの?」

ミヤザキ 「それでもやるんだよ。まあでも確かに普通に話しても盛り上がるねーか」

モリベー 「お題。修学旅行、2田舎、男子部屋、夜。はい！」

モリベーが手を叩くと、3人は床に仰向けになり横並び。

モリベー 「お前らもう寝たー?」「まだーなんか寝れなーい」

ミヤザキ 「ミヤザキはー?」「寝てないけど」

モリベー、「バツとうつ伏せになる。」

モリベー 「じゃあさ。ちょっと話そうぜ。ぶつちやけトークな「オッケー。嘘禁止だからねー」(ミッチーうつ伏せに)」「いいけど、口外するなよ」

モリベー 「つたりめーだろ。じゃあ聞くけどよー。今付き合ってる奴とかいたりするー?」「ミッチーどうだよ?」「えーっと、僕はー」「うん」

モリ・ミヤ 「うん」「いるー」「マジかよー?」

モリベー 「付き合つてどれくらいなんだ?」「あー、ごめん。嘘。いないー。いぬつて言いたーい」

モリベー 「つたく焦らせんなんよ」



演劇 UNIT WAN-WAN BOTAN
「卒業 -2025 年度卒業生 Ver-」

ミヤザキ
モリベー
ミッチー

モリベー
ミヤザキ
ミッチー

「ふーん。そういうものか」「あー、全然共感してねー奴いるぞー」「ねー」「悪い」

「素直に謝らないで。余計傷つく」「で、ミヤザキはその彼女とはなげーのか?」「まあ、5年くらいか」

「5年!」「結婚は?」「そういう話も出てこぬ」「マイホームは?」「貯金はある」「だつはー!」「なんだよー順風満帆、絵にかいたような人生かよ」「なあ?修学旅行」つーはもうやらないのか?結構楽しかったんだけど」「もうミヤザキとはやつてあげないよー」「うたく。勝手に大人になりやがってよ」「なんだよ。もう28だし、別に普通だろ」「あつはー!」「俺たちも普通になりてーな、ミッチー」「あーごめん。モリベー。やっぱり一緒にされるのは抵抗あるかも。僕はモリベーより全然可能性あると思つた」「あー? 結局サクちゃんに告白できなかつた奴が何言つてんだ」「あ、いやそれはそれでまた別の話」「なんなら今日10年越しの想いぶつけてみるかー」「ちょっと待つてよモリベー。何言つてるのさ」「ちょっと待つのはお前だ。ミッチー」「なに、ミヤザキ」「なに、ミヤザキ」

「お前、サクちゃんに告白しなかったのか?」
「渡せなかつたんだってよ。第2ボタン」

「なんでだ?」

「風が強かつたんだよ。ビュービューって。臆病風ってやつ?」

「……」

「「こめん」」

「直れ」

「え?」

「いいから直れ! 正座だ!」

慌てて、正座をするミツチー。ミツチーを挟むモリベー、ミヤザキ

ミヤザキ
ミツチー
モリベー

ミツチー

ミヤザキ

モリベー

ミツチー

ミヤザキ

モリベー

ミツチー

モリベー

ミツチー

「ミヤザキ君、大城さんのこと詳しいよね?」

「大城さん? ああサクちゃんか。別に普通だよ。同じ部活つてだけで」

「サクちゃん。ちゃんづけなんだ。彼女の私は苗字にさんづけなのに」「いやいや。サクちゃんはサクちゃんつてあだ名だから。第一お前だっておれのこと、ミヤザキ君じゃないか」

「もういい。別れよ? サよな」



演劇 UNIT WAN-WAN BOTAN
「卒業 -2025 年度卒業生 Ver-」

ミヤザキ
ミツチー

「近藤やーん!」
「あははは。なにそれおかしい」

「お前のせいだろ」

「小学校の頃からの幼馴染にずっと片思いつてのもなかなかねーから結構応援してたんだけどな」

「小学生の時に、サクちゃんが転校してたんだったか」

「そりそり、5年生の時。5年3組!」

「ちょ、ちょっとなんでクラスまで覚えてるの」

「……」

「僕が喋つたんだろうね。10年たつても覚えてられる程度には」

「転校生に一日ぼれつて。なんかいいよな」

「いや、確か一日ぼれじやなかつたはず」

「あれ、そうだっけ」

「うん。一日ぼれとは違つたかな。もちろん可愛いなーとは思つてたけど。小学校の頃はお互いわいわいはしゃぐタイプでもなかつたし、2人で話したりみたいなことはなかつたかな」

「本格的に気になりだしたのは、中2の頃だつて言つてたな」

「あー思い出した。確かに生徒会がなんとかつて」

「そうそう。中2の時サクちゃんが生徒会の選挙に出たんだよ。人一倍人見知りで人前で何かを発表するなんて一番苦手だったのにだよ。女優を目指すんだから、これくらいこなしてこの性格変えるんだつて言つてた。がっちがちに緊張しながらスピーチしてて。そんな姿みてたらいつの間にか好きになつてた」

「フー！」

「それで高校に上がって、サクちゃんが演劇部作るつていつもなんだから」

「うん。この中の誰よりも早く演劇部員になつてた。お芝居のことなんてなんにも知らないのにね」「なんかドラマみてーだよな」

「でも結局、告白しなかつたんだよな」

「だからごめんつて」

「とんだヘタレだよ。折角、脚本家ミヤザキ様と計画して、ああいう配役にしてもらつたのになあ」

「え? なにそれ」

モリベー

ミヤザキ
ミツチー

モリベー

モリベー

モリベー

モリベー

モリベー

モリベー

モリベー

ミヤ・モリ

「ちょ、ちょっとなんでクラスまで覚えてるの」

「……」

「僕が喋つたんだろうね。10年たつても覚えてられる程度には」

「転校生に一日ぼれつて。なんかいいよな」

「いや、確か一日ぼれじやなかつたはず」

「あれ、そうだっけ」

「うん。一日ぼれとは違つたかな。もちろん可愛いなーとは思つてたけど。小学校の頃はお互いわいわいはしゃぐタイプでもなかつたし、2人で話したりみたいなことはなかつたかな」

「本格的に気になりだしたのは、中2の頃だつて言つてたな」

「あー思い出した。確かに生徒会がなんとかつて」

「そうそう。中2の時サクちゃんが生徒会の選挙に出たんだよ。人一倍人見知りで人前で何かを発表するなんて一番苦手だったのにだよ。女優を目指すんだから、これくらいこなしてこの性格変えるんだつて言つてた。がっちがちに緊張しながらスピーチしてて。そんな姿みてたらいつの間にか好きになつてた」

「フー！」

「それで高校に上がって、サクちゃんが演劇部作るつていつもなんだから」

「うん。この中の誰よりも早く演劇部員になつてた。お芝居のことなんてなんにも知らないのにね」「なんかドラマみてーだよな」

「でも結局、告白しなかつたんだよな」

「だからごめんつて」

「とんだヘタレだよ。折角、脚本家ミヤザキ様と計画して、ああいう配役にしてもらつたのになあ」

「え? なにそれ」

モリベー
ミッチー

ミヤザキ
ミッチー

「最後の本だよ最後の本。全国行つたやつ。結構なアシストだったと思つぜ」「あの配役つてそういう意図があつたの?」

「まあ、多少はな」
「氣づかなかつたな」

部屋のドアが開き、サクちゃんローズが帰つてくる。

ローズ
モリベー

ローズ
モリベー

ローズ
モリベー

ローズ
モリベー

ローズ
モリベー

モリベー
サクちゃん

モリベー
ミヤザキ

ローズ
ミッチー

モリベー
モリベー

ローズ
モリベー

ローズ
モリベー

ローズ
モリベー

ローズ
ミヤザキ

ローズ
サクちゃん

モリベー
ミッチー

「おーっす！野郎どもー 盛り上がりつてるかー」「おせーぞー なに長話してんだよ」

「女の子には女の子同士喋りたいことがいっぱいあるんだって」「なーにが女の子だ。平成ガチババアがよ」

「へー、そんなこと言つんだ」

「その辺でフブ＆ベリーでもやつてればー」「そういうこと言つなら、モリベーお酒なしね」

「えー！」

「お、酒か」

「このメンバーでお酒、はじめてつしょ。コンビニ酒だけどナ」「気が利くー！」

「待つて。俺も飲ませて」

「えー、ムシキングでもやつてればー?」「頼むぜー！」

「お、みんな結構いける口なんだね。はい、好きなのとつてー」「おー、エビスあんじやんエビスー！俺これもーうい」

「あー、それアタシのー！」

「ちょっと待つた！エビスといつたらおれだ」

「私もエビスの気分になつちやつたなあ」「じゃあ僕も」



演劇 UNIT WAN-WAN BOTAN
「卒業 -2025 年度卒業生 Ver-」

ローズ 「ちょっと、ミッチー仕事中でしょ」
ミッチー 「あ、そつか。そうだった」

モリベー 「細かいこと言つなよ。無礼講だ。無礼講」
サクちゃん 「じゃ、久しぶりにあれ行きますか」

モリベー 「よしきた」

5人同時に、じゃんけんのいわゆる「見えるやつ」をやる。

サクちゃん 「演劇ジャンケン！」

ミ・宮・モ・ロ 「演劇ジャンケン！」

サクちゃん 「グー（石のジェスチャー）」

ミ・宮・モ・ロ 「チョキ（鍼のジェスチャー）」

サクちゃん 「パー（紙のジェスチャー）」

5人 「よよいのよい」

各々勢いよく、出した手のジェスチャーを行う。何度もあいこを挟みミヤザキが勝利する。アホみたいに喜んでるやザキ。皆の由に田。視線に気付か

「ま、デキル男はエビスつて昔から決まってんだよ」
「さすがミヤザキ」

「あっただけ喜んだのに」

「絶対に崩さないプライド」

「よー、お見事ー。」

4人拍手する

「どうした? お前ら。早く飲み物選べよ」

「じゃあアタシはねー」

ローズ
ミヤザキ

皆わいわいお酒を選びに行くが、モリベーはふと何か考えだす

ローズ

モリベー

ローズ

モリベー

「ほいモリベー。あまりものー。どうしたの頭悪そつな顔して」「やうじやさ、ローズ。お前なんでローズなの?」

「は? ロ//ジコ?」

「さつきあだ名の話がチラツと出たんだよ。サクちゃんはサクちゃんがあだ名だって。わかりやすいよな。大城桜でサクちゃん。
他の奴らって三井でミッキー。ミヤザキはミヤザキだし。おれだって名前縮めただけだろ」「確かに。木下華菜でローズはよくわかんないね。なんでだつける?」

「ローズは城づいたらローズだったもんな」

「あれだ。ローズクイーン」

「それだ!」

「そうそう! 初舞台の時の役の名前。舞台終わっても定着しちゃって」

「よく覚えてたね。ミヤザキ君」

「あの本書いたの俺だしな」

「そうだったそうだった! 敏腕脚本家ミヤザキの初脚本」

サ・モ・ロ

「チューリップの大冒険」

「いや一笑つたよな。こーんな難しい顔してのやつがさ、どーんな小難しい話書いてくるかと思つたら」「とびきりのラブファンタジー」

「可愛いとこあるじゃんつてみんなで笑つてさ」

「どんな話だつける。あ、あの時はモリベーが主人公だったよね」

「お花の国の心優しき村人チューリップ」

「え? ゃんのか? どんなだつける?」

「毎朝花に水をあげる」の瞬間が

ミヤザキの助け舟に乗り、ただだとしく其腰を始めたモリベー



演劇 UNIT WAN-WAN BOTAN
「卒業 -2025 年度卒業生 Ver-」

モリベー
ミヤザキ
モリベー
サクちゃん

「花に元気をあげると」

「不思議といつかも元気が出していく。すねと今日はいいことがおかれみんながしげるんだ。こんな感じだったよな~。」

「モリベー? どうしたー? 照れが見えねー」

「芝居中の照れは一生の恥ー」

「よ! 大根役者ー!」

「お前らな。芝居なんて何年ぶりだと思つてんだ」

「でも霧岡はそんな感じだ。そしてあの田、チューリップはお花の国のお女ローズと出合つ

「見とけよモリベー」

ローズ、ガラツと霧岡気を変えお芝居を始める。

ローズ 「ふふ。お城抜け出してせちやつた。お城の外は広いな」

ローズのお姫様ぶりに思わず吹き出すモリベー

ローズ 「何笑つてんの」

モリベー 「いやだつて」

ミッキー 「芝居とめると後で怒られるべー」

サクちゃん 「ほり、集中ー」

モリベー 「君、見かけない顔だな」

ローズ 「きやつー。誰ー? 悪漢?」

「ううん、僕はアッカント名前じゃない。僕の名前はチューリップ」

「そう。私はローズ。一応王女つてことになつてゐけど。お城がつまらなくて抜け出してせちやつた」

「なんだつけー? (無静音で尋ねる)」

「樂しいと」ふたぐわん

「じゃあ樂しことこのたぐわん案内してあげるよ」

モリベー

ミヤザキ

モリベー

ローズ

モリベー

ミッキー

サクちゃん

モリベー

ローズ

モリベー

ミッキー

サクちゃん

モリベー

ローズ

モリベー

ミッキー

モリベー

ミッキー

モリベー

ミッキー

モリベー

「ほんと！ 嬉しい！ ありがとう」

「ローズす」「いね。セリフ元齋ちゃん。全部覚えてるの？」

「まさか。ニュアンスだけ。あとはほとんど即興」

「そうは見えなかつたな」

「誰かさんと違つて照れてないだけ」

「悔しい！」

「す」「いねす」「いね。確かに細かい所は違つけどあの頃のお芝居がよみがえつてしまふ」

「」「ひじで出会つたナコリップとローズは」「そり出かけ」「」とが多くなる。だけど」

音響車のせばにいたミヤザキが機械をじじぬと、BGMが流れ出す。

ミツチー 「お、BGMいいね」

サクちゃん 「待つて。これって」

ミヤザキ 「ああ。当時実際に流したBGMだ。MDが残つてた」

モリ・ロー 「フー！」

ミヤザキ 「さ。サクちゃん。ど」「わ」

サクちゃん、ブロリンのせばに移動し芝居を始める

サクちゃん 「皆の者、注目いたせ。」「おわすは野菜の国」の王、アレキサンデロス・ブロッコリー大王である。私は大臣のカリ・フワワーである

ミツチー 「そうだそつだ。サクちゃんはブロリンとの悪役タッグだ」

サクちゃん 「どわつははは。花の国の諸君。隣国の大鉄の国が」「花の国」に戦争を仕掛けとの情報が入つた。武力をもたぬ花の国には滅びる未来しかないであろう。と王は申しております」

モリベー 「なんだつて」

サクちゃん 「しかしこの野菜の国が助けてやるのではないか。わしは妻に先立たれて悲しみに暮れる毎日。どうだらう、その王女」

「え」

ローズ

ローズ

ミツチー

ローズ

ミツチー

ローズ

モリベー

サクちゃん

ミヤザキ



演劇 UNIT WAN-WAN BOTAN
「卒業 -2025 年度卒業生 Ver-」

サクちゃん
ミッキー
モリベー
ミヤザキ
ローズ
ミヤザキ
「我の妃となれ。すればこの花の国の未来は保証する」と申しております。「

「やつぱいなあ、サクちゃんのブロリン」

「ブロリンではないんだけどな」

「大王をやる役者が足りなかつたんだからしようがないだろ?」

「結果オーライ結果オーライ。私、人形のブロリン好きだよ」

「そして、決断を迫られたローズとその弟のシーンが入る」

ミヤザキ、音響卓を操作。BGMが鳴る。ミッキー、少し緊張している

ミッキー
「好きなかい姉ちゃん?」

ローズ
「え? どうしたの? ラフレシア?」

ミッキー
「姉ちゃんの好きなのはブロッコリー大王じゃないでしょ?」

ローズ
「そうね。違うかもしれない。でも、国の幸せのため。未来のため。私は彼に嫁ぐの」

ミッキー
「姉ちゃんの幸せは?」

ローズ
「国の幸せが私の幸せ」

ミッキー
「そんな」

ローズ
「ありがと。おやすみ、ラフレシア」

ミヤザキ
「国のため政略結婚を受け入れるローズ。うん。我ながらいい話だ」

ミッキー
「はー緊張した」

ミッキー、ナイスファイト

「で、鉄の国云々ってのは野菜の嘘だつたんだよな。ブロリンがローズを妃にするための」

「ああ。そしてその事実を知ったラフレシアが頼つたのは」

ミヤザキ、音響卓を操作。BGMが鳴る。

ミッキー

「助けてくれ。チュリップ。姉さんを助けられるのはお前だけだ」

モリベー
「王子様、頭あげて。僕は村人だ」

ミツチー
モリベー
「王子じゃない。弟として姉を助けてくれって言つていろ。だから頭も下げる」「わかつた。喜んで。タケ！ 行くぞ」

掃除用具入れの近くに移動していミヤザキ、箒を素早く取り出し構える

ミヤザキ
モリベー
ミ・ミヤ
サクちゃん
ローズ
ミヤザキ
ローズ
「やつと出番か。血が騒ぐ」
「タケはこの村一の槍使い。力になる。いべん！」
「おうー」
「わーー 盛り上がりつて来たね。いよいよクライマックスだ」
「みんなが助けに来てくれたのを聞いて、ローズはうれしいんだけど、ここで彼らの手を握るど」「野菜の国がたちまち花の国を亡ぼす」
「だから突っ放すんだ。心を鬼にしてなるの、冷酷なローズクイーン」

ミヤザキ、音響を操作。BGM。

モリベー
ローズ
モリベー
ローズ
サクちゃん
モリベー
サクちゃん
モリベー
サクちゃん
モリベー
「ローズ今なんて？」
「聞こえなかつた？ 帰れつて言つたの。もう私はこの国の女王。あなたたちへの情などどうになくなつた」「タケもラフレシアもここまではこれなかつたけど君のために戦つたんだぞ」「頼んでない」
「ぬわつはつは。何が目的か知らんがここまでだ盗人よ。と王が申しております」「ブロッコリー！」
「無礼者。ブロッコリー大王とおよびつい」「お前に用はないんだ。カリ・フラー。用があるのは」「宝か。宝當てか。ぬわつはつは、残念であつたな。わしは強欲な野菜の王。アレキサンダロス・ブロッコリー。宝と名の付くものはすべてわしの腹の中。食つてしまつたわい。盗めるものなら盗んでみるがよい! ぬわつはつはと王は申しております」「王はすべて腹の中?」
モリベー



演劇 UNIT WAN-WAN BOTAN
「卒業 -2025 年度卒業生 Ver-」

5人

「あつまほほほほ」

少し、ストップモーションをした後笑い出す5人。ミヤザキが音響を操作し、BGMを落とす。

4人
サクちゃん
「うおおおおおおーー！」

ローズ
モリベー
サクちゃん
ミヤザキ
ミッチー
ローズ
モリベー
サクちゃん
モリベー
ローズ
モリベー
ローズ
モリベー
サクちゃん
モリベー
ローズ
モリベー
「楽しい」と「Nya~」
「世界は広いんだ。まだまだたくさん…楽しいことでいっぱいだ。一緒に帰ろう」「ローズ気は確かに、忘れたわけではあるまい。わしが裏切れば貴様の国は…」「國は守るう一緒に。さあ」

モリベーの手を取るローズ

「そうともヤ。宝物庫じゃあ油断がならん。腹の中にあればどうれる心配はないからなあぬわつははつは」「ローズ。王にとつて君は宝じゃないんだってヤ。どんな卑怯な手を使つても君大事にするなり、それで君が幸せなら僕は手を引くつもりだつた」「貴様！ なにをするつもりだー」と王がお怒りだ」「僕の大切な人を返してもらひつ。さあローズ」「でも」「お城の外の楽しいところ全部見たつもりか？」「楽しいと」「Nya~」
「世界は広いんだ。まだまだたくさん…楽しいことでいっぱいだ。一緒に帰ろう」「ローズ気は確かに、忘れたわけではあるまい。わしが裏切れば貴様の国は…」「國は守るう一緒に。さあ」

「いやあなんだかんだ。できたね」

「ほつとんどエチユードみたいなもんだったけどな」

「後半は結構いい芝居してたじやん。ミチベー」

「混ぜないでよ（混せんなよ）」

「サクちゃんも最高だったよ」

「えー、ありがとう」

「サクちゃんが悪役したのってこの芝居だけだよね。結構好きなんだー悪役サクちゃん」

「カリフラワーは悪役じゃないよ。彼女はブロリンのことが好きなだけだから」

「え、そうつだつたの？」

「私の中ではね」

「おつとーミッチー。ブロリンに焼きもちかー」

「なにそれ。やいてないよ」

「強欲な王様。宝物はおなかの中にため込んで……」

「どうしたの？」モリベー

「だからめちゃくちゃ重たいって設定で。少しでも重くするためには実際に」

モリベー、ぶつぶつ言いながらブロリンの頭を取り外す

ミ・虹・サ・ロ 「ええええ」

モリベー 「ほりー・ビンゴー！」

ミッチー 「ちょっとまって。ブロリン頭外れたつけ？」

サクちゃん 「言われてみたらそんな仕掛けもあったような」

ローズ 「中は？ 中。何入ってるの？」

モリベー 「それがよー。俺入れた覚えないんだけど。これタイムカプセル？」

「タイムカプセルー？」

「多分おれたちの」

「全然覚えてないや」

サクちゃん

モリベー

ローズ

ミチ・モリ

ローズ

サクちゃん

ローズ

サクちゃん

ローズ

サクちゃん

ローズ

サクちゃん

ローズ

サクちゃん

ローズ

サクちゃん

ローズ

モリベー

ローズ

モリベー

ローズ

モリベー

ミッチー

モリベー

ミッチー

モリベー

ミッチー

モリベー

ミッチー

モリベー

ミッチー

モリベー

ミッチー



演劇 UNIT WAN-WAN BOTAN
「卒業 -2025 年度卒業生 Ver-」

ミヤザキ 「いや確かに、卒業式の後、川セン発案でプロリンをタイムカプセルにした」

サクちゃん 「おおお川センか」

ミツチー 「顧問の川嶋先生。元気かな」

ローズ 「懐かしいな。でも確かに川センなりタイムカプセルとか貯ってた」

サクちゃん 「みんな青春の最後にどうきつ青春しよう！」

ミツチー 「川セン。青春って何すの？」

サクちゃん 「すばりタイムカプセル。開けた瞬間忘れたはずの青春が顔をのぞかせたのよ。マーツ青春ー。」

ミツチー 「ああ川セン、貯ってた」

モリベー 「なあー それなんの中の物、発表していいかー。」

サクちゃん 「おっ。わくわくするね」

モリベー 「だろ。俺がいなきやタイムカプセルなんて思ひ出せなかつたんだから、感謝しろよ」

ミツチー 「モリベーだつてタイムカプセルのこと忘れてたくせに」

モリベー 「ばつか。頭が外せるのを思つ出せなせや、みつけられなかつたら」

ローズ 「いいから早くしてよ」

モリベー 「わかつたつて。おつ」れは、俺だな。懐かしいな

ミツチー 「もつたいがうないでよ」

ローズ 「あの時代の人氣者つて『ハマバナ』の人たかでよ。解散ライブなんて夢にも思わなかつたなー」

サクちゃん 「あ。わかつたかも」

モリベー 「私も。モリベー、あれでしょ？ 私たちの『ードイングソング』ー。」

宮.ミ.サ.ロ 「ご名答ー。我らが平成時代の顔！ 風の通算20枚目のシングル」

「Happiness」

「我ながら、神がかつたチョイスだぜ」

「本当にー。モリベーナイスー」

「確か、ミーティングが続いた時期があつて。皆『が滅入つちやつて』

「せめて皆でテンション上がる曲持ち寄つてかけようー！ つてなつたんだよ」

「絶対モリベーがもつてた Happiness ばつかかけてたんだよね」

「やつぱるの時は風が最強だつたもんな。感謝しろよ。ジャニオタのねーちゃくからCDもひいてるやつが使われた

んだから」「う

「はいはい。感謝感謝」

「本当に何回も聞いたよねーー」
「皆好きすもでミーティング中にロードさんじゅうて、話進まないなんてのもヤバいじゃん」

「走りだせー♪」

「走り出せー♪」

「明日を迎えて行こう♪」

「君だけの音を聞かせてよ 全部感じられて♪」

「止めないで 止めなこで」

「これは誰のだー？ 稽古ノートって書いてある」

「あ、それアタシだ」

「止めないでーーー？ 今気持ちよく歌つてこただる」

「そうだよ。お気読めないな」

「俺に許可なく歌いだす方が悪い」

「はあー？ なんだそれ」

「歌はみんなで遊べないからやめなさい。皆で楽しめる遊びを選んでなさい」

「あっはっは。思い出した。ミヤザキ君つてす"い音痴だった」

「そうだった。そうだった」

「そういうえば、カラオケで特訓したよね」

「したした。土日集まってフリータイムでさ」

「ミヤザキにあれこれ教えられるのかレアだったよな」

「そんな可愛らしげヒピソードもなければ、俺は音痴じゃない」

「じゃあ一緒にハピネス歌おつぜ」

「音程を合わせるのが苦手なだけだ」

「音痴なんじやん」「音痴なんじやん」

「そもそも音程を合わせるという行為が理解できない。なぜ俺が音程に嘘偽を売らなければならんのだ。ナーナーおじいちゃんが、音程がおれに合わせろ」

ローズ

サクちゃん

ミツチー

ローズ

モリベー

サクちゃん

ミツチー

ミ.サ.モ.ロ

ミヤザキ

ローズ

モリベー

ミツチー

ミヤザキ

モリベー

ミヤザキ

ローズ

ミヤザキ



演劇 UNIT WAN-WAN BOTAN
「卒業 -2025 年度卒業生 Ver-」

ローズ
サクちゃん
ミツチー
モリベー

ローズ
ミヤザキ
ローズ
モリベー

ミヤザキ
ローズ
ミツチー

サクちゃん
ローズ
モリベー

サクちゃん
ミツチー
モリベー

ミヤザキ
ローズ
ミツチー

サクちゃん
ローズ
モリベー

サクちゃん
ミツチー
モリベー

ミヤザキ
ローズ
ミチ・モリ

ミヤザキ
ローズ
モリベー

ミツチー
モリベー

サクちゃん
ローズ
モリベー

4人拍手する

「さすがミヤザキ」
「歌が苦手って言えぱいいだけなのに」
「絶対に崩さないプライド」
「よー お見事ー！」

「それで? この稽古ノートかわいい。みんなで読むか」
「ギヤー何考えてんの。ダメ」決まってるじゃん

「そうなのか? 歌が上手ならともかく稽古ノートも上手なんだから?」
「何その理屈。怖すぎるんだけど」

「いやー、ミヤザキは根に持つねー」

「稽古ノートってあれでしょ。ローズが日記代わりにつけてたノート」

「やうやう。その日のダメ出しとか決まった段取りとかも細かくメモしてた。……みたいなー」
「ダメダメ。いくらサクちゃんでもダメ」

「ちえー」

「どうせまじめなことしか書いてないんだから恥ずかしがる」とないじゃんね」
「稽古ノート改め眞面目ノート」

「ダメ出しなんかもひつちり書いてあつてた」
「めちゃくちゃ苦手だった」

「お前達はダメだし多かつたもんな」

「親の仇みたいにセ、稽古終わりにはダメ出しの洪水」
「僕らは稽古ノートに押しつぶされて死んじゃう夢までみたんだから」
「う、『めんね』」

「それだけ伸びしきがあつたんだよ」
「そりそり。そういうこと」
「ふーん」

サクちゃん
ミッキー

サクちゃん
ローズ

サクちゃん
ローズ

「Jの中でも一番お芝居好きだったのはローズだったよねえ。稽古ホームセツだしき、練習だつてほんとんど休まなかつたし」「高校卒業してからもお芝居してたのつてローズだけだつたよね
「そつそつ。今もお芝居、続けてるの?」
「ううん。女優は諦めちやつた。結構食ういついたつもりだつたんだけどね。とうとう親にいい加減じぶつて。今は実家の八百屋へいらっしゃい! つてね」

「そつかあ。またローズのお芝居みたかっただけど、残念だなあ」「そういうサクちゃんは?」

「え?」

サクちゃん
ローズ

サクちゃん
ローズ

サクちゃん
ローズ

「サクちゃんはなんでお芝居やめちやつたの? サクちゃんだつてお芝居大好きだつたじゃん。演劇部作つたりナ」「まあそつなんだけどね」「なんで?」

ローズ
モリベー

ミッキー

モリベー

ミッキー

モリベー

ミッキー

モリベー

ミッキー

モリベー

ミッキー

モリベー

ミッキー

「……やつか」「おーいミッキー。面白こもん出でせたが」

「え?」「じゃじゃーん」「おおおおおお

「僕の稽古着」

「なんでこんなの入れてんだ」

「さあ。そつと入れるもの思いつかなかつたんじやないかな」「じゃあ早速お着換えタイムだな」

「ええー? いやいや着替えないよ」「恥ずかしがんなつて」

「いや別に恥ずかしいとかじやなくて」「じゃあなんだよ」「モリベー」

ミヤザキ



演劇 UNIT WAN-WAN BOTAN
「卒業 -2025 年度卒業生 Ver-」

ミツチー
ミヤザキ
ミツチー
モリベー
ミツチー^{ミツチー}
ミヤザキ^{ミヤザキ}
ミツチー^{ミツチー}
モリベー^{モリベー}
「そつち側抑えられ」
「ええー？」
「よしきた」
「やつやつ。ミヤザキからせきつてやつて。悪がけが過ぎるつて」
「そつち側抑えられ」
「ええー？」
「よしきた」

ミヤザキ、モリベーでミツチーをホールド。

ミツチー
モリベー
ミヤザキ
モリ・ミヤ
ミツチー
サクちゃん
ミツチー^{ミツチー}
サクちゃん
ミツチー^{ミツチー}
サクちゃん
ミツチー^{ミツチー}
サクちゃん
ミツチー^{ミツチー}
ローズ
モリベー^{モリベー}
サクちゃん
宮・モ・ロ^{ミツチー}
モリベー、ミヤザキを振りほどぎ、ホワイトボードの後ろへ移動するミツチー

「警備員を抑え込むとかとんだ悪党じやないか」「
「いや、ちやんちやうむせーよ」「
「よしー、サクちゃん」「
「脱がせろ」「
「2人して何言つてんの。セクハラだよ。今の時代本当に厳しいんだから服を脱いた方がいいよ?」
「ええ」「
「ほらサクちゃん困つてる」「
「いいの?」「
「思つてた反応と违つー」「
「いや、ミツチーの稽古着姿みたいじゃあ」「
「え、あ、そう?」「
「あはは。ミツチー照れでる」「
「照れてなつよ、何言つてんの」「
「早くしろよ」「
「じゃあ失礼して」「
「フー!」「
「わーっ! わかった。一人で着替えるからー。もう」

ローズ
ミヤザキ

ローズ
ミツチー

サクちゃん
ミヤザキ

「ん？」
「わざわざ隠れなくても。当時なんて皆、田の前で着替えてたの！」

「いやミツチーは当時も隠れて着替えてた。なんなり女子が着替へるとせば田をつむつてた」

「嘘つ。ピコアー」

「ほつといじよー」

「ねえミヤザキ君は？」

サクちゃん
ミヤザキ

「タイムカプセル。何入れたの？」
「あー、シャーペン」

「え！ シャーペンー？」

「うつはー。マジだ。マジでシャーペン入つてた」

モリベー
ミヤザキ
モリ・ロー

「恥かくのは、ごめんだつたからな」

「可愛くねーガキ！」

サクちゃん
モリベー
ミヤザキ

「うういやさ。なんか当時恋のおまじないみたいなの流行らなかつたか？」

サクちゃん
ローズ
ミヤザキ

「あつたあつた。好きな人の名前を書いた紙をシャーペンに入れて誰にも見つかなければ恋が成就するとかなんとか」

「お、ミヤザキまさか」

「そんなわけがないだろつ。バカバカしい。生憎、おれは女に不自由したことないんだ」

「うわー嫌なやつ」

「まあ、ミヤザキ君が恋のおまじないとかしてたら笑つちやうよね」

「全くだ」

「いや、なんか入つてるぞ？」

「何？」

「ほら、紙」

「なんてなんてなんて書いてあるの？」

「あつはつは。近藤さんだつてよー」

「完全に、おまじないじゃん」

サクちゃん
モリベー

モリベー
サクちゃん



演劇 UNIT WAN-WAN BOTAN
「卒業 -2025 年度卒業生 Ver-」

「しかも、ちゃんとけって
ミヤザキ
モリベー

ミヤザキ
ローズ
ミヤザキ
ミヤザキ
サ・モ・□
ミヤザキ
サクちゃん
ミヤザキ
モリベー
ローズ
ミヤザキ
ローズ
モリベー
モリ・ロー¹
ミヤザキ
サクちゃん
ミツチー²
ローズ
サクちゃん
ミツチー³
モリベー⁴
サクちゃん
モリベー⁵
ローズ
モリベー⁶
モリ・ロー⁷
ミヤザキ
サクちゃん
ミツチー⁸
ローズ
サクちゃん
ミヤザキ
モリベー⁹
ローズ
サクちゃん
ミツチー¹⁰

「俺そんなことしてたのが…」
「してたんだろ。ほら証拠」
「陰謀だ。誰かが俺をねたんで貶めようとしている」
「誰がそんなことすんのよ」
「じゃあ、あれだ。デスノート」
「デスノート…？」
「もう。名前書いて殺すつもりだったんだ。心臓麻痺で」
「元カノを？」
「そうだ」
「それはそれで黒歴史だよな」「恋のおまじないしてましたって言えば済む話なのに…」「…そういうたらお前ら、笑うじゃないか」「そりやむちうるせ」
「腹抱えて笑うけど」
「フハハハハハ」
「こんなはずじゃなかつた。何で俺が一番恥かいてるんだ」「まあまあミヤザキ君にも、可愛いとこあつたつて…」「ねよつとー。人に着替えやせじて何樂しそうな会話してたのや」「おおおー。ミツチーだー！」
「やっぱその服着るとミツチー感が増すねえ」「確かになんとなく若返った気はする」
「ほひ。ミツチー、ポーズどれ」「おー、顔硬いぞー」「はーい。こっちも向いてー」「ファンサしてー」「何で僕の撮影会が始まつてんの」

「安心した。ひやかの盛られたので撮ってやつから」

三ツ子一
一盛らなくていいよ!
ていうか折角なら僕のじやなくてみんなで撮るうな

「確かにそれもそうだ」

「いいねいいね」「サクちゃん

モリベー「何気にはじめてじゃねーか。集合写真なんてよ」

「あー、そうかもー。」

ミツチー 「え？」

「いやあの時は」「いやザギ」

「あつはつは思い出した。撮影の日、モリベー水痘瘡で学校休んでさ」

「高校生はなつて水瘤瘻にてみて
ミツチ」

「ま、う、最、あ、ざ。」ペルメザン

4人

ミッキー 「見せて見せて」

「あせせ、ぬつかやここじやん」

「これストーリーにあげていい?」

「僕は街を駆けめぐるよ。」

「二三回口で送ればいいが、二三回も送らなければ、

「お前ともかく」

モリベー 「何で嫌そんなんだよ」

「これで、タイムカプセル全部だっけ」

「うふ？ あー（数えて）いやらと/or/くなじ？」

モリベー 「あと誰だー」



演劇 UNIT WAN-WAN BOTAN 「卒業 -2025 年度卒業生 Ver.」

サクちゃん

モリベー

ローズ

富・サ・モ・ロ

サクちゃん

ミヤザキ

ローズ

ミッチー

ミヤザキ

ミッチー

ミヤザキ

ミッチー

ミヤザキ

モリベー

ミッチー

モリベー

ミッチー

モリベー

ミッチー

モリベー

ミッチー

モリベー

ミッチー

サクちゃん

ミッチー

モリベー

ミッチー

ミヤザキ

「なんだ」

「地方紙。全国行った後も取り上げられたの覚えてない？」

「……ああ。覚えてる」

「あ！ あの焼肉！」

「はじめはワンカルの予定だつたんだけど」

「川センが金賞獲つた教え子に安い肉なんて食わせられんつて言つてお店急遽変更、それがなんとなんと」

「叙々苑！」

「川セン太っ腹だよねえ」

「あのあときつかり後悔してたけどな」

「あはは。川センっぽい」

「ね、ねえ。ちょっと待つて。皆本氣で言つていいの？」

「もちろん。叙々苑は眞じだらう」

「そりや、叙々苑はおいしかったよ。ワンカルだつて美味しいつて思つてたけどその何倍もつて。そういうやない、焼肉の話じやないよ」

「じゃあ一体なんの話だよ」

「県大会で金賞をとつて全国に行つた時の話だよ。むかひんその時は本当に嬉しかつた。皆の夢が叶つたんだもん。でも今となつてはいい思い出じやない。夢なんか叶わなければって何度も思つたよ。勝手にみんなもやつ思つてたんだつて思つてたけど、違うの？」

「当たり前だろ。めちゃくちゃ良い思い出だつて。もしかしたら人生で一番かもしけねえ。皆だつてそうだろ。ミッチーハ。お前、さつから何言つてんだ？」

「そつか。モリベーは覚えてないんだ」

「だから、何をだよ」

「皆は？」

「……私も、何の話かわからないや」

「そつか。……そつか」

「お前、ほんといい加減にしりつて。何の話してんだつて」

「ミヤザキ」

「なんだ」

「……ああ。覚えてる」



演劇 UNIT WAN-WAN BOTAN
「卒業 -2025 年度卒業生 Ver.」

ミッチー 「内容は?」

「北高演劇部、全国にて鑑評。やはりまぐれだつたか。県大会にて審査員貢収疑惑浮上」

「そんなこと書かれてたのか」

「ああ。小さな記事だつたけど」

ローズ

「やんとお詫びもされたけど」

「俺だつて。そりや、結構きつこいと聞かれたつたりといひこせりつから覚えてるけど」

ミッチー 「うつむいた?」

「でもそんなのなんていとなじばずだろ? 頭硬い審査員には好きに言わせとかまじいていつも皆で笑い飛ばしてたじゃねーか

「その時だけはやつでやなかつたんだよ。……覚えてないの? 全国で鑑評を受けた理由」

モリベー 「いやそこまでは」

ミッチー 「覚えてない? うつむいたとも? なんでも~あの全国の舞台でサクちゃんは死にかけたんだよー?」

モリベー 「ええつ」

「あの舞台で一步間違えばサクちゃんは死んでたかもしれないけれど、忘れちゃつてるんだ? いい思い出だつたねつて笑つて話せるんだー?」

サクちゃん 「ちょっと待つて、ミッチー。もしかしてあの事故のことお聞きついたの? あんなの『氣』とかないじやないよ。私『氣』した」となんかないじ。そんなことで、いい思い出じやなかつたなんて言わないでよ」

ミッチー 「『氣』する」とだよ。僕にとつては、そんなことで片付けられるよつなことじやないんだ。僕だけじやない。――この皆は一生

気にしないといけないはずなんだ。サクちゃんが作った演劇部で、サクちゃんが死にかけた。あれだけお芝居が好きだったサクちゃんがお芝居に殺されたとこだつたんだ。うつん、お芝居じやない。僕たちに殺されたとこだつたんだ」

「ミッチー」

「僕は今でも時々夢に見るんだよ。あの舞台のラストシーン、サクちゃんが死にかけるあの瞬間を。夢の中で僕は謝るんだ。『め

んねつて。夢の中のサクちゃんは笑顔で許してくれるんだけど夢の中の僕は僕を絶対に許さないんだ』

「あのさ~ 悪いけど僕やっぱり覚えてねーよ。なあ、本当にそんなことあつたのか? だとしたらサクちゃんは、なんで死にか

けたんだよ?」

「……モリベー。なんで何も覚えてないんだよ。お前。なんじだよー。」

「つるせーなつー。なんでも糞も知るかよ。忘れてるもんは忘れてるんだ。忘れた理由なんて覚えてるわけねーだろうが」

モリベー

ミッチー

モリベー

モリベー

ミッキー 「逆ギレかよ」

「大体、俺の中の演劇部の思い出は楽しい」としかないんだよ。俺が夢の中で『お前はこうもりねえ』ってわいわい笑

つてるんだ！ それを死にかけたとかいい思い出じゃないとか、言いがかりつけやがつてよ」

「言いがかりつてなんだよ」

「言いがかりだらうが！ 人の思い出出すんじゃねえよ」

「……なんだよ。なんだよ。その言ふ方」

「なんだやるか、泣き虫ミッキー」

「望むどいいだ。北嶋警備室の吉田沙保里とは僕のことだー。」

つかみ合いのケンカに発展するミッキー、モリベー。お互いが突き飛ばしたところで間に割つて入るローズ。

ローズ 「ちょっと！ いい加減にしなよ！ 一人ともー…落ち着いてー！」

ミッキー 「ローズはよく落ち着いてられるね」

ローズ 「落ち着くも何も、もう10年も前のことなんだよ。サクちゃんは生きてるんだし、これからあつたけどいい思い出だった。もう

でしょ？ ね？ サクちゃん」

サクちゃん 「うん、そうだよ！ 楽しかった！ いい3年間だつたー！」

ローズ 「ほら2人仲直りしなー。10年ぶりなんだから暗い話は抜きでか」

モリベー 「そこだけよ、ローズ」

ローズ 「のくわけないじゃん。バカベー。いい年して何殴り合ひしてんの？」

モリベー 「年は関係ねーだろうよ」

ローズ 「あるでしょ。いつまでガキのまんまのつもり？ 少しは大人になれつて言つてんの」

モリベー 「大人になるつてなんだよ。夢追いかけて挫折して実家の八百屋継ぐ」とがそつなのかなよ」

ローズ 「何それ。私のことは関係ないじゃん」

モリベー 「曲慢のノートはそういう時、助けてくれねーんだな」

モリベー、ローズの稽古ノートを手に取りパラパラめぐる



演劇 UNIT WAN-WAN BOTAN
「卒業 -2025 年度卒業生 Ver-」

ローズ 「は?. わよつと触らないでよ」

モリベー 「おうおう。こんなに細かく毎日毎日。これが何の役にも立たないなんて、超ウケるな」

サクちゃん 「ちょっとモリベー」

モリベー 「こういうもん捨てねーと大人になれねえってんなう? そんなもんになる価値なんかねえよバーカ」

ローズ 「放つておいてよ!」

モリベーの頬を打つローズ。

モリベー 「いつてーな」

ローズ 「何も覚えてないからって、私に当たんないでよ」

「アシュツ」ミヤザキが缶ビールを置け、飲む。

サクちゃん 「こJんな時、何飲んでんの」

ミヤザキ 「Hビス。あーあず」

ミヤザキ、缶ビールを置き立上がる。

「ミッキー、押しけるなよ。あの事故をどう受け取らうがそいつの血田だ」

「だつて」

「全部忘れてるなんであまりにもひどい。か?」

「その通りだよ」

「別にひどくないヤ。都合の悪いことは忘れて、思い出を美化して。それにすがらなきややつていけなかつた。それだけだろ? な

あモリベー」

「お前に俺の気持ちはわかんねーよ」

「そりゃそうだ。俺は勝ち組だからな」

「そういうとこ。治らないねミヤザキ。だから嫌われるんだよ」

ローズ

モリベー

サクちゃん

モリベー

ローズ

モリベー

ローズ

モリベー

ローズ

モリベー

「嫌われ上等。負け組に堕ちるよつよつぱざーこ」

「あつそう」

「ていうかローズ、お前も忘れてただいへ」

「え?」

「あの事故だよ。サクちゃんが死にかけた」と、お前も忘れてただいへ。暗い話は抜せうじて、自分のいと欄にて上手にいつわつせつへ

「やないよな」

「アタシは忘れてなんかないよ。忘れた」となんかないよ」

「じゃあなんでサクちゃんに「あんなこと聞けたんだ?」

「あんなことって」

「サクちゃんは、なんで芝居やめたのかつて」

「それは」

「決まってる。あの事件のせいで。あの芝居で死にかけたからだ。俺たちのせいじゃないか」

「ち、違うよ、ミヤザキ君。本当に芝居やめたのとあの事故は関係ないから。昔と3年間お芝居やつて全国まで行つて満足しちゃつたんだよ。出し戻へしたんだ」

「出し戻へした? お前がか?」

「やうだよ。やり切つたんだ」

「それは嘘だ」

「嘘じや」

「嘘じや」

「嘘じやないなら。……変わつてしまつたんだな。一回外國行つたらいじで芝居でやがれんかやんなレベルじゃなかつたよ。お前の

#芝居好きは

「ミヤザキ君」

「初めてだつたんだぞ。好きなもので人に負けたと思ったのは。俺だつて芝居は好きだった。でないと何本も本なんか書けない。正直この中の誰よりも芝居が好きだったと思っていたし、芝居でも誰にも負けないと思ってた。でも一緒に芝居して直感した。これはおれなんかより遥かに芝居が好きなんだなつて。敵わない。なんならいつの演技をそばで見ていたいと思つたんだ。この俺がだぞ」

「本当に芝居をやめたのとあの時の事故は関係ないんだよ……ただ。昔とお芝居するのが楽しそうたのかな、他の人たちとお芝居しようつてあんまり思わなかつただけなんだ」

サクちゃん



ミヤザキ 「……そつか。お前にしては、案外普通なんだな」

サクちゃん 「そりやそつだよ。私はお芝居が好きで女優になりたかった、それだけのど」「でもいつの普通の元女子高生。お芝居始めた理由も

辞めた理由も平凡に決まってるよ」

ローズ 「……サクちゃんが平凡?」

サクちゃん 「え?」

ローズ 「それは無理あるって。実力をひけらかさないのはサクちゃんのいいと」「だけど。そこまで来ると流石に嫌味だよ」

サクちゃん 「ローズ?」

「サクちゃんはどんな役をやらせても、キラキラ輝いてた。サクちゃんにしかできないその役にならんだ。結局、私一回もサクちゃんには敵わなかつた」

サクちゃん 「何言つてゐるの? ローズめちゃくちゃお芝居上手だったじゃん。私、ローズのお芝居お手本にしてたんだよ?」

ローズ 「演技の上手い下手の話じゃないんだよ。ていうか普通にサクちゃん演技うまかつたし。でもそういう表面的なと」「ううじやなくてさ。もっと根っここのところで本物の女優だったって言つてゐる。私、自分の役やりながら、サクちゃんだったらどう表現するのかな、どう演じるのかなって考へながらずっと芝居してた。卒業してからもだよ。それでいつか、ちゃんと胸張れる女優になつて、サクちゃんと対等な立場で肩並べて一緒に舞台に立つのが私の目標だった! 夢だつた!」

サクちゃん 「……対等とか何言つてゐるの? はじめから最後までそつだつたじゃん」

ローズ 「なのにさ。そんな普通な理由で何勝手に芝居辞めてんのー? 勝ち逃げしないでよー。」

サクちゃん 「……ねえ。ちょっと。みんなおかしいよー。さつきから何言つてゐるの? 私そんなにすうくないから。ずっと一緒にいたんだからそんなのどうぐ知つてゐるはずでしょ? なのに勝手にすうじやつだすじやつだつて持ち上げてさ、人を超人みたいに崇めて。何これ」

ローズ 「十分超人じやん。崇めて何が悪いの。追いかけて何が悪いの。お芝居のことだけじゃないよ。いい大学行つてそれなりの会社で働いて、寿退社」

サクちゃん 「別に普通じゃん」

「それを普通つて言えるのが超人なんだつて、なんでわかんないかな」

ローズ 「……そつか。気づかなかつたなあ。私超人だつたんだー。ちょっと背伸びした大學に入れたはいいけど、これといった目標はな

くつて、お芝居もなんとなくする気になれなくて、気づいた時にはなんだか周りとなじめてないなって違和感があつて、でも必死になんとか取り繕い続けて、そのままなんなく就職して、なんとなく仕事して、表面だけ元気な無氣力人生。若さつて武器もいつの間にかなくなつてて。このまま何にもない人生が続くのかな一つで諦めかけてた時に、そんな私でも愛してくれる素敵なお人

静寂。

と出合えて、ああ。こんな私でも普通に結婚して普通に子供産んで普通に幸せになれるんだって。希望がそこして、やじたところで病気になつて子供産めなくなつて。彼はそれでも結婚してくれるつて言つけれど、彼はとっても子供が好きで。結局自分から結婚断つて。すゞいですよ超人の人生！ 苦労も苦悩も全くなし！ あー順風満帆……バカじゃないの。一緒だよ。私もミツチーもモリベーもミヤザキ君もローズもみんな一緒に。……一緒に」

「……サクちゃん」「なーに」「うめん」「なにが？」「色々」「私、同情なんかいらないよ」「違うよ。私そんなつもりじゃ」「ごめん。意地悪いってみただけ。怒つてないよ」「あー久しごりにケンカした。結構体力使うんだね。……皆」「うめん」「あ、あのさ、話蒸し返して悪いんだけど。サクちゃんの事故ってなにがどうなつたんだ？」俺覚えてないつて言つたのに話進んじやうからずつとモヤモヤして「最後の台本覚えてるか？」
「ああ、「旅立ちの日」だろ」「正確には「Goodbye 青春～旅立ちの日」～」「そんなタイトルだけ」「ださいよね」「高校演劇の審査員はこういうのが好きなんだ」「それで？」
「ラストシーン、サクちゃんが首を吊るシーンだ。本来は重々こころえられずロープがほどけて自殺は失敗する筋書きだつたんだけど」



演劇 UNIT WAN-WAN BOTAN
「卒業 -2025 年度卒業生 Ver-」

サクちゃん

「ほじける仕掛けがうまくいかなくてさ」「……俺、なんでそれを覚えてねえんだ」

「知らないよ」

「いやいや待て待て。そもそも首つりだったか?」

「え?」

「サクちゃんの自殺。首つりだったか? 飛び降りじゃなかつたか?」

「ええ? あれ、でも言われてみたら飛び降りも記憶にあるな」「だろ。屋上のシーンで」

「いやでも確かに首つり……あれえ」

「台本が変わったの。県大会までは確かに飛び降り。でも全国では首つり」

「なんで?」

「県大会終わった後、審査員の人の批評で首つりのほうがよかつたんじゃないって言われて。ほら死を連想させる具体的なアイ

「テムがあつた方が緊張感や臨場感がうまれるとかなんとか」「それでラストシーン変えたのか」

「皆、そんな必要はないって言つたんだけどね。演劇の評価基準なんて曖昧なんだ。審査員に媚びて何が悪いって」

「おい、モリベー。こつちを見るな。その目やめろ」「あ。悪い」

「言つておくけど、仕掛けの段取りはしつかりやつてあつて危険はなかつた。仕込みがうまくいくれば何の問題もなかつたんだ」「仕込みでなんかあつたのか」

「その時の舞監アタシでさ。ロープのセットをしたのもアタシ。本番の日さ、小道具のロープがなかつたんだ。仕掛けがしてあつたやつ。だから急遽市販のロープで間に合わせことになつて。テストではうまくこつたんだけど……」「じゃあ小道具は? ロープの担当は? 誰だつたんだよ」

全員がモリベーを見る。静寂。

モリベー 「……俺、ロープの担当、俺だつたのか?」

ローズ 「……うん。ほり」

稽古ノートを見せるローズ、それをしばりく眺めるモリベー。

モリベー
サクちゃん
「違うよ、モリベー！ あれ私だつて悪いんだ。ホントはミッチャーが舞台に入つてから直をつけなさいの」と、先走つちやつて。かやんとミッチャーが入つてくの待つてた。ロープの仕掛けがうまくいかなくとも鍔で切つてくわね！」となつてたのに」

ミッチャー
ローズ
モリベー
ミッチャー
サクちゃん
「……思い出した。舞台袖でその鍔が見つからなくて、それで出るのが遅れて……」

「皆、ちょっとずつ悪かつたんだ。ほら。当時の私たちもそつ書いてる。誰も誰のことも責めてない」

「そつか。ちょっとだけ気が楽になつたよ」
「僕たちが原因でサクちゃんが死にかけたつて事実は変わらないけどね」「ミッチャー、ありがとね。ずっと気にしてくれて。でもね我全然気にしないから、忘れてたぐう。どつかかとこいつとあの記事の方がつらかったな」

ローズ
ミヤザキ
サクちゃん
ミヤザキ
ローズ
モリベー
ミッチャー
ミヤザキ
モリベー
ミッチャー
ミヤザキ
モリベー
ミサモロ
ミヤザキ
モリベー
ミヤザキ
ローズ
サク・ミチ

「今思い返してもむかむかする」「安心しろ。あの新聞社どつくに潰れたから」「え、そうなのー？」

「ああ。経営が傾いてたらしくわ」「性格悪いかもだけど、ちょっとこう『気味かもだなー』

「とか言つて、実は銀行員ミヤザキが融資断つたのがどめだつたりして」「かもな

「……マジでー? ……」「わー」

「冗談だぞ」

「冗談に聞こえねーつて。ミヤザキならやりかねねーもん」

「……そんな風に見えてるのか？ そこまでしないで？ 僕は」「かわいそつーミヤザキが傷ついてる」

「モリベー」



演劇 UNIT WAN-WAN BOTAN 「卒業 -2025 年度卒業生 Ver.」

モリベー 「これ俺悪くなくない?」

それぞれ笑い出す。

「じゃあみんな、ケンカは終わりでいい?」

三ノ矢

卷之三

「でもねえでござる。お嬢ちうひどいは」

「変わらなきすぎ。皆、高校生のまんま年だけとつたみたい」

「それ書いてる。いぢゅ前に酒だけ飲んでさ」

十八

三ノ子山

サクちゃん

ミッキー

サケちゃん

卷之三

卷之三

□=ズ

「しかもなんと飛び降りバージョン」

サケちゃん
おお。
やつは、つちのほうかいいよね。
ミヤサキ君は書きたいもの書いた時の方があいんだから

モリハ
三三二一の不歸附にかいな

卷之二

「じゃあまず打合せだねえ」
サクちゃん

ローズ
モリベー
「あ！ モリベー」
「わかつてゐつて」

モリベー、音響車を舞台奥に移動させ、そのまま CD プレイヤーを操作。嵐・「Happiness」が流れ。サイレンソードみんな打合せを始めた。じょじょに曲の中、「5人の打合せ風景が続く。真剣でアツ樂しそう。その最中で、ホワイエボーグを動かしたり箱馬を動かしたりと舞台をする準備もドキドキする。途中でモリベーが掃除用具入れの上に置かれた小道具と書かれた BOX を取りに行き、

モリベー
ローズ
モリベー
ローズ
「おわー！」
「どうしたの？ モリベー」
「いや、俺多分すいもん見つけちゃった」
「なにな！」

モリベー、布のようなものを手に持つて立る

モリベー
「じょくせー。 ジヤジヤーん。」

ミッキー、ミヤザキ。布を広げると、それは「北高演劇部ー」と書かれた垂れ幕。

虹ミサロ
ローズ
サクちゃん
ミッキー
サクちゃん
ローズ
モリベー
サクちゃん
「うわあああああああ！」
「垂れ幕だあー。」
「す」「……。残してくれてたんだ」
「あれ。演劇の劇つて激しいだつけ」
「ううん。これはね。川センが、演劇とは歴史ある文化でもあるが、激しく動か、激しく心を揺さぶらるるスポーツだよねー。つーか
れ幕は必要であります。演劇の劇は「激しい」と書いてべきじゃない。つーか
「言つてた。言つてた。」
「せつかくだし飾つとこうぜ。俺たちがいるこの部屋は北高演劇同好会じゃない。北高演劇部だからな」
「こここといつじやんモリベー」



演劇 UNIT WAN-WAN BOTAN

「卒業 -2025 年度卒業生 Ver-」

ローズ
モリベー
「モリベーのぐせに珍しい」「ばつか。俺はいつだつて」

ミヤザキ、モリベーから垂れ幕を奪い、壁に垂れ幕を張り付ける

ミヤザキ
ローズ
サクちゃん
ミツチー¹
サクちゃん
モリベー²
サクちゃん

「こなんもんでどうだー」「おおお。部室だー」「演劇部だー」「この学校で初めてお芝居したのは僕たちなんだ。最後にお芝居するのも僕たちでなきゃね」「うん。その通り。…みんな。準備はいい?」「おうっ」「じゃあ行くよ。卒業式。Goodbye 青春～旅立ちの日～」

5人、円形になる。

サクちゃん
宮.ミ.モ.口
サクちゃん
宮.ミ.モ.口
サクちゃん
宮.ミ.モ.口
5人
「おたー」——演劇部——ふあいつ
「おつ」
「ふあいつ」
「おつ」
「ふあいつ」
「おつ」
「ふあいつ」とおおおおおーおおおおおおー

5人気合を入れそれぞれの位置へ。ミツチー、サクちゃんは立ち位置。残りのメンバーは箱馬に座る。内、一名は音響卓を操作できるようスタンバイ。(劇中回想シーンは音響を入れる。(そのシーン時に出演していないメンバーが操作という決まり事の上で5人は芝居をする)
サクちゃん真剣な面持ちで、決意をし靴を脱ぐパントマイム。そしてミツチーが入ってくる。

ミツチー 「千歌ちゃんー。」

「……なーに。」

サクちゃん

ミツチー

「こんなとこで何してんだ? 卒業式始まつひやうよ。」

「それは、みつかやんも一緒でしょ。」

ミツチー 「寒いよ。……靴。履きなよ。」

サクちゃん 「ねえ。2回目だね。」

ミツチー 「何が?」

サクちゃん 「屋上で、2人で恋つの。」

ミツチー 「そうだね。」

サクちゃん 「思い出すね。」

風の音などの環境音を流す。ミツチー、靴を脱ぐパントマイム。真剣な面持ち。

サクちゃん

ミツチー

「うわあ。びっくりした。と、隣のクマスの」

サクちゃん 「岡本千歌。どうしたの? 」

ミツチー

「え、いや。」

サクちゃん 「高橋君も歌の練習? 気持ちいいよね。屋上から歌つとナ。」

ミツチー

「あ、いや、えつと。」

サクちゃん 「違うか。そりやそつだよね。合唱部じゃあるまいし。」

ミツチー 「お、岡本さんは合唱部なんだ。」

サクちゃん 「そうだよー。部員私入れてふたりだけど」

ミツチー 「そうなんだ。」

サクちゃん 「それで? 高橋くんは」「」

ミツチー 「いじめなんかでつて思つ?」

サクちゃん 「え?」

ミツチー 「その程度のことで自殺なんつて思つ?」



演劇 UNIT WAN-WAN BOTAN
「卒業 -2025 年度卒業生 Ver-」

サクちゃん 「……」「

ミッキー 「そりゃはたから見たりさう思つかもしれないけど。僕」といはるの程度の「ほんじゃないんだ。生きてるのがつら。生きてても

も楽しいことがない」

サクちゃん 「何も~。」

ミッキー 「何も。僕だつてやがるなり生きてこたいや。死ぬのは恋こよ。ドヤ」

サクちゃん 「あらゆ。樂しき」と。やあほど」

ミッキー 「なこよ。どりじむ眞当だらなこよ」

サクちゃん 「ひつじとで、今は隠れかやつてゐただけだよ」

ミッキー 「……やつなのかな~。」

サクちゃん 「もつとやつだよ」

ミッキー 「だつたうじいな」

サクちゃん 「……やつだー高橋君。会唔部まじりなご~。」

ミッキー 「え~。」

サクちゃん 「会唔部2人しかいないから、今のおおじやコソクールも出でられないんだ。友達を助けねじ黙つてや」

ミッキー 「……いや、歌なんて苦手だし」

サクちゃん 「でも今樂しそうつて思つた?~」

ミッキー 「え~。」

サクちゃん 「じやそんな顔に見えたから。会唔やつてだらもしかしたら辛くなくなれるかも」

ミッキー 「本当じい?~」

サクちゃん 「ダメだつたらその時また」に来たひこつよ。……」いつかな

手を差し出すサクちゃん。一瞬迷い手を離すミッキー

ミッキー 「やつてみゆ~」

音響がなくなる。

サクちゃん 「今思えば強引だったかな」

ミツチー 「強引すぎだよ」

サクちゃん 「やつぱつ」

ミツチー 「でもそのあとの方がよっぽど強引だったけど」

音響が入る。ミヤザキ、モリベーが立ち上がり芝居に入りてくれる

モリベー

「おうおう、パシリのミノソン。俺たちを呼び出すとは偉くなつたなあ」「どうした? おれたちに金を貸したくなつたか」

モリベー 「あつはつは。それは傑作だ」

ミヤザキ 「やつぱりおれたちは友達だ。息がぴつたり。俺たちもひょうど金をかりたいって思つていただんだ」

サクちゃん 「あなたたちだったんだ。高野君、石橋君」

モリベー 「誰だお前」

ミヤザキ 「岡本。何の用だ」

サクちゃん 「いやあ別に用つてほどのことでもないんだけどね」

ミヤザキ 「じゃあそこをのけ。俺たちは実とお話しするんだ」

サクちゃん、ミヤザキの頬を打つ。

サクちゃん 「サイテー」

ミツチー 「ちょ、ちょっと岡本さん」

モリベー 「おい、いきなり何するんだ」

サクちゃんにつかみかかるうそすうのモリベーを手で制すミヤザキ

ミヤザキ 「何の真似だ」

サクちゃん 「ムカついたから殴つたんだ」



演劇 UNIT WAN-WAN BOTAN
「卒業 -2025 年度卒業生 Ver-」

モリベー 「頭おかしいんじゃねーか
「ムカつくからこじめると回り」
サクちゃん 「……」
ミヤザキ 「頭おかしいんじゃないの」
サクちゃん 「なるほどな。女の子に助けられた気持ちでこんな感じだ実」
モリベー 「高橋君をいじめてた」と呟めるんだね
モリベー 「だつたらなんだよ。『うぎ』ってーな」
ミヤザキ 「おい高野」
モリベー 「あん?」
サクちゃん 「察しがいいね。たすが学年トップの『石橋君』」

サクちゃん、胸ポケットからレコードをとりだす。

モリベー 「レコードーー」
ミヤザキ 「俺たちに何をさせたい。実に謝れってか」
ミツチー 「いや。いいよそんなの。別に、無理やりそんなことさせたって」
ミヤザキ 「違うのか? ジヤあなんだ」
サクちゃん 「合唱部にはこうつてよ」
ミヤ・モリ 「はあー?」
サクちゃん 「コンクール出るのに人数あと2人足りないんだ」
ミツチー 「やっぱ無理があるよ岡本さん。このふたりに合唱なんて」
サクちゃん 「そう? 歌うと心は晴れるし前回そこになれるし、幸せになれる。むしかばったりだと思つせど」「ふざけんなよ。わつ3年だぜ。今更部活なんて」「まあ別にいいけどや(レコードをもひあげる)」「きつたねーな」「コンクールが終わつたらいつれあげる」「…………やるしかないな」

モリベー 「まじかよ」
サクちゃん 「ありがと」
ミヤザキ 「ようしづな、実」
ミツチー 「う、うん」

音響がなくなる。モリベーとミヤザキはストップモーション。

ミツチー 「まさかあの2人と合図すんな」といなーとはね
サクちゃん 「やつてよかつた?」
ミツチー 「まあね」
サクちゃん 「じゃあよかつた」
ミツチー 「でも最初大変だったんだよ。千歌ちゃんは知らないかもしれないさ」
サクちゃん 「え? 何かあったの」
ミツチー 「実はね」

舞台の端におけるサクちゃん。音響に入る。ローズ、ミヤザキ、モリベーがお芝居に入つてへぬ。

ローズ 「あのヤ。あんたたち」
ミツチー 「何?」
ローズ 「やる『気なしなり合図部やめてくれぬ?』
モリベー 「あ? なんだいきなり」
ローズ 「事情、詳しくは知らないけど。無理やり合図部はいつたんだよね?」
ミヤザキ 「だから何だ? ちゃんと練習にも出てこぬだ」
ローズ 「出でぬだけでしょ。やる『気ないなりほんと』にやめて。迷惑だから」
モリベー 「口に氣をつけろよ」
ローズ 「ほつかり言おうか? アンタたちと一緒に歌つくりながらスクールなんて出たくないの。不愉快だから」
ミツチー 「やつまでも言わなくたつて」



演劇 UNIT WAN-WAN BOTAN
「卒業 -2025 年度卒業生 Ver-」

ローズ
ミッキー
ローズ
ミヤザキ
ローズ
「あんたも。千歌のこと好きなのかななんか知らないけどさ。不愉快だから」「え、いや、全然そんな」「とにかく。辞めるなんなら事情は説明してあげるから、いつでも言つてね」「おい佐々木」「学年トップも大した」とないね。じゃ。」「学年トップも大した」とないね。じゃ。」「

ローズ、立ち去る。別の音響に切り替わる。

モリベー 「あつたまた」
ミヤザキ 「まったくだ」
ミッキー 「あの、辞めたがつたら辞めていいよ。レコードも渡すし、僕は何もしないから」
ミヤザキ 「見くびるなよ。実」
ミッキー 「え」
ミヤザキ 「特訓だ」
モリベー 「あのくせ女に田に物見せてやる。「旅立つの田」へうい楽勝だつづーの」
ミッキー 「あはは。千歌ちゃんの言つ通りだ」
ミヤザキ 「何がだ?」
ミッキー 「課題曲の「旅立ちの田」はね。前を向く歌なんだ。前を向いてどんどん前に進むその最初の一歩なんだ一つ言つて。ホントにそういうふなーつ」
ミヤザキ 「最初の一歩上等だ」
モリベー 「よつしゃ。特訓だ。気合入れるぜ」
ミッキー 「よーし、みんなをせやふんと言わせねーーー。」
モリベー 「おおおおおお」

音響がなくなる。ミヤザキ、モリベー、ストップモーション。

サクちゃん 「へーそんなことがあつたんだ」

ミツチー 「うん。毎日自主稽古してたんだよ」
サクちゃん 「じゃあねべくしてなつたんだね、金賞」
ミツチー 「うん、僕もそう思う」

音響が入る。ローズ、芝居に入つてくる。

サクちゃん 「コンクールお疲れ様ーそして金賞おめでとーーかんぱーい！」
富ミ・モ・ロ 「かんぱーい！」
ローズ 「まさかここまでこれるとはね」
サクちゃん 「ねー。前を向いてどんどん先に進む最初の一歩。良い一歩だったね」
ローズ 「ていうか千歌、のど大丈夫？ 途中声でてなかつたけど」
サクちゃん 「大丈夫大丈夫。酷使しすぎたんだね」

ミヤザキ、モリベー立ち上がる

ミヤザキ 「実」
ミツチー 「なに？」
ミヤ・モリ 「すまなかつた」
ミツチー 「ええ！ もういいよー顔あげて」
モリベー 「結局謝まれてなくて」
ミヤザキ 「もう一度とああいうことは誰にもしない」
ミツチー 「うん。わかった。レコーダーも渡すね」
ミヤザキ 「いや、それは持つておいてほしい」
ミツチー 「……わかった。さー飲もう盛り上がり」
サクちゃん 「（息苦しそうにせき込む）」
ローズ 「千歌大丈夫ー？」 ほひティッシュ



演劇 UNIT WAN-WAN BOTAN
「卒業 -2025 年度卒業生 Ver-」

ティッシュをむりい痰を吐き出すサクちゃん

サクちゃん 「ありがと」

ローズ 「千歌……それ」

サクちゃん 「え」

ローズ 「血」

全員がサクちゃんを見た。ローズ、ミヤザキ、モリベー立かたる。音響がなくなる。

ミツチー 「探したんだよ。今日一時退院するって聞いてたから久しぶりに学校で会えるって思ったのに、卒業式の列にもいないから」

サクちゃん 「よくここだつてわかつたね」

ミツチー 「…なんとなくここにいる気がしたんだ。いてほしくなかつたけど」

サクちゃん 「ごめんね」

ミツチー 「靴履きなよ」

サクちゃん 「(首を横に振る)」

ミツチー 「…なんで。なんで千歌ちゃんが」

サクちゃん 「楽しかったから。今晩との思い出振り返つただけで、幸せになれりうりう樂しかったから」

ミツチー 「意味が分からぬよ。なおさらなんでも」

サクちゃん 「私の病気」

ミツチー 「治るんでしょ? 手術大丈夫なんだよね?」

サクちゃん 「うん。手術も大丈夫だし絶対治るって言われた。でも声出せなくなんだつて」

ミツチー 「え。声?」

サクちゃん 「声帯を取るんだつて。私、もう一生歌えなくなるんだつて」

ミツチー 「千歌ちゃんが一生歌えなくなー」

サクちゃん 「問題なく生きれるんだから、嘆く」となんかないはずなんだけどね。それでももう私の心は晴れないし、前向きになれないし、

「幸せになれない」

ミツチー 「そんなこと」

サクちゃん 「そんなことない?」

ミツチー 「……」

サクちゃん 「私は、この先、この幸せなみんなとの思い出を憎むようにならぬかもしない。それが嫌なのーだったら幸せなまま、幸せだった学校で全部終わりにしたい!」

ミツチー 「千歌ちゃん……」

サクちゃん 「その程度のこと」で自殺なんてつて思ひ?」

ミツチー 「……」

ローズ、モリベー、ミヤザキが入つてくる。3人が入つてくの前に音響を操作。

モリベー 「ここにいた!」

ローズ 「千歌!」

ミヤザキ 「岡本!」

ミツチー 「……みんな」

ローズ 「……千歌。何じての?」

サクちゃん 「『めんね』」

サクちゃんに駆け寄りつくるモリベー/ミヤザキ/ローズ。

サクちゃん 「来ないで……」

3人の足が止まる。

サクちゃん 「みんなのこと嫌いになりたくないの。好きなままでいたいんだ」

ミツチー 「……嫌いでいい。嫌いでいいよー。憎んでいいー。千歌ちゃんに嫌われたつて憎まれたつて、生きていってくれるならそれだけで僕たちは幸せだ」

サクちゃん 「なんでー。なんでわかってくれないのー。みつちゃんー」



演劇 UNIT WAN-WAN BOTAN
「卒業 -2025 年度卒業生 Ver-」

ミツチー 「好きだから！ 好きだからわかつてあげたくないんだ」
サクちゃん 「わかんない… 意味わかんない…」

サクちゃん飛び降りようとする。サクちゃんを止めるミツチー。

サクちゃん 「放してよ…」
ミツチー 「放さない…」

ミツチー、サクちゃんを安全な方向へ突き飛ばし、共に床もとをつぶ。

サクちゃん

「…………じゃあさみつちゃん。一緒に死んでくれる？」

ミツチー

「…………こじよ。そんなの簡単すぎる。でも。僕は千歌ちゃんもちゃんと一緒に生きたい」

サクちゃん

「…………」

ミツチー

「もうひとつ頑張ってみなさい。ダメだった時の時みたいに来たりこ。…………どうかな？」

サクちゃん

「…………」

ローズ

「千歌…………」

ミヤザキ

「ん？」

モリベー

「どうした？」

ミヤザキ

「聞こえないか？」

「旅立ちの日に」の伴奏が聞こえてくる。一番の終わりのあたりぐらごから FI°

ローズ 「旅立ちの日に」

「体育館からか」

「前向きになれる歌」

「どんどん先に進むの最初の一歩……」

「懐かしい友の声 ふとよみがえる♪」

ローズ
モリベー
ローズ
モリベー
ミヤザキ

口ーズが加わり

ミヤ・ロー 「意味もないさかに 泣いたあの時♪」

モリベーが加わる。

宮モロ

「心通つた嬉しさに 抱き合つた日よ♪」
「みんな過ぎたけれど 瞳は坚强くだして♪」

ミツチー、サクちゃんもそれぞれ合唱に加わっていく

5人

「勇気を翼に込めて 希望の風に乗り
」の広い大空に 夢を託して

今 別れの時 飛び立とう 未来信じて
はづむ 若い力 信じて
」の広い「」の広い 大空に♪

今 別れの時 飛び立とう 未来信じて
はづむ 若い力 信じて
」の広い「」の広い 大空に♪

最後の伴奏で、お互い微笑みあい、5人近づき寄り添つ形になる。伴奏が消えないとともにスマッシュモーション。

ミヤザキ 「臨場。……そのままで終幕」



演劇 UNIT WAN-WAN BOTAN
「卒業 -2025 年度卒業生 Ver-」

5人、まばらに拍手をする。

ローズ 「みんなお疲れ様」

モリベー 「お疲れ。皆、出し切ったなあ…」

ミヤザキ 「ああ。いい芝居だった」

ミツチー 「うん。最高の最初の一歩だ」

サクちゃん 「……千歌はね、私の分身なんだ。きっと今日の千歌は、これから前を見て歩いて行けるんだと思つ」

ミツチー 「僕もそう思つ」

サクちゃん 「……みんな一卒業おめでとう…」

ローズ 「おめでとう」

モリベー 「おめでと！」

ミヤザキ 「おめでとう」

ミツチー 「おめでとう」

5人、軽く笑いあう。

モリベー 「すげースッキリした」

ミヤザキ 「お、もうこんな時間か。俺そろそろ始発で出ないと」

サクちゃん 「そつか」

ローズ 「アタシも仕入れに行かなきや。ブロリンともお別れだね、アタシの最初の旦那さん」

「それ素敵だね」

「今度は大事にしてくれる男見つけるよ」

「モリベーに言われたくないよ」

「うっせ」

「あれ、ブロリンってさ。結局ものす」ブローズのこと愛してたんじゃなかつた?」

「そんな設定あつたか?」

「あつた、あつた。ねえミヤザキ君」

ミヤザキ君

「ああ。宝物はどんなもでも食つちまうんだが、ローズの写真だけは大切すげー」
「がでやが、服の下に肌身離さずして設
定だつた」

サクちゃん
ローズ
5人
ミツチー
サクちゃん
ミツチー
モリベー
ミツチー
サクちゃん
モリベー
ミツチー
モリベー
ミツチー
モリベー
ミヤザキ
ローズ
モリベー
サクちゃん
ローズ

「はははは」
「ああああー」
「どうしたの? びっくりしたあ」
「川セン」

「え?」

「どうしたの? びっくりしたあ」
「川セン」

「え?」

「記憶はほんやりなんだけど川センも何か入れてなかつた? タイムカプセル」

「あ。入れてたかも」

「え、でもブロリンの中にはもう何も」

「いや、だから」

「……服の下?」

「脱がせろ」

「ほんとだーあつたーあつたよー!」

「おおおおお! すげー!」

「何が入つてた?」

「写真! 集合写真」

5人集まつて、写真を眺める

モリベー
ミツチー
サクちゃん
ローズ
モリベー
「集合写真ちゃんと撮つてたんだな」
「川センやるなあ」
「頭あがらないねエ。ほんと敵わない」
「今頃笑つてるかもね」
「写真の俺たち、揃いも揃つてアホ面してやがんな」



演劇 UNIT WAN-WAN BOTAN
「卒業 -2025 年度卒業生 Ver-」

ミヤザキ
ミッキー
モリベー
ミヤザキ
サクちゃん
ローズ
ミッキー
サクちゃん

「あーアホらし」

「どうする?」」の写真、サクちゃん持つて帰るか?」

「え? 私?」

「サクちゃんしかいないでしょ」

「そうだよ」

ミッキー

「そっかありがと。でもいいや、これはここにあった方がいい気がする。(息を吸い) ブロリン大王、民が大事しているとのうわ

ブロリンのベルトに写真を差し込み、また服を開じる。

サクちゃん

ミヤザキ

サクちゃん

ミヤザキ

モリベー

ミヤザキ

ミヤザキかつこよくポーズを決め、微笑み、部室を後にする

ローズ
モリベー
ミッキー^{ミヤザキ君らしいね}
サクちゃん
ローズ
ミッキー

「ミヤザキ。最後の最後にかつこつけていったね」
「かつこついてたか? あれ」「僕は好きだよ」「じゃあアタシもさひわん」「そつか」

ローズ
ミッキー

「ちゃんと野菜も食べなよ、ミッキー」
「買ひに行くな」

サクちゃん
「またね」

「うん。モリベー、またな」

「おう、またな」

ローズ
モリベー

ローズ、部屋から出でてく

モリベー
サクちゃん
モリベー
ミッキー

「あいつのお芝居もつかいみてみたいんだけどなあ」

「それ言ってあげたらいいのに」「嫌だよ。恥ずかしい」

「ま、またいつか見れるんじゃない?」

「私もそんな気がする」

「よしこじやあ俺も。帰つて寝るかー」「お疲れ」

モリベー
ミッキー

「また連絡すいよ。サクちゃんも」「うん」

「こいつかいつまわるよ」「じゃ。あさみ」

モリベー

モリベー、部屋から出でてく

サクちゃん
ミッキー

「モリベー行つちやうと寂しくなるね」「騒がしいから、あいつ」「じゃあ。私たちもさっさと行く?..」「そうだね」



演劇 UNIT WAN-WAN BOTAN
「卒業 -2025 年度卒業生 Ver-」

ミッキー、部室から出てこいつとかね

サクちゃん 「ミッキー、その服で出でいくの？」

ミッキー 「あ。忘れてた、稽古着だつたー」

サクちゃん 「忘れてたんだ」

ミッキー 「だつてすうぐ着心地に違和感なくて」

ホワイトボードの裏に隠れるミッキー、着替える

サクちゃん 「あのさ」

ミッキー 「うーん?」

サクちゃん 「あのセリフセ」

ミッキー 「どのセリフ?」

サクちゃん 「うれしかったよ?」

ミッキー 「え、いやだからどのセリフ?」

サクちゃん 「秘密」

ミッキー 「えーなにそれ」

ミッキー着替えて出でくる。警備員の姿

サクちゃん 「おつミッキー大人バージョンだ」

ミッキー 「ま、いいけどさ」

サクちゃん 「じやいこつか」

ミッキー、稽古着のズボンに何かが入つてゐることに『気が付く』
ポケットから取り出してみると第二ボタン

ミッキー 「あつはまつは」
サクちゃん 「え、なになに」
ミッキー 「秘密」
サクちゃん 「えー」
ミッキー 「これはパソコンのおげよつ」

パソコンに近づき、第二ボタンを服の下につまみ。

ミッキー 「またね、ブロリン」
サクちゃん 「ねー何入れたのー」
ミッキー 「だーかーら、秘密」
サクちゃん 「ま、いいけどさ」

ミッキー部屋から出ていく。サクちゃん部屋をゆっくり見渡し

サクちゃん 「あらがとつーまたねーつー」

サクちゃん、電気を消し、部屋を出でいく。鍵が閉まる音。残された部屋。
ヒンティング曲が流れ、終幕。